

「失われ迷い傷つき 弱った魂のために」

荻窪栄光教会 井上義美



わたしは、うせたものを尋ね、迷い出たものを引き返し、傷ついたものを包み、弱ったものを強くし、肥えたものと強いものとは、これを監督する。わたしは公平をもって彼らを養う。

エゼキエル 34・16

40年以上前の教会学校の思い出をたどると、クリスマスの記憶がよみがえってきます。祝会には、教会主催のボイスカウト活動の関係や、近くの児童自立支援施設から子どもたちも集っていました。近隣の子どもたちが多数詰めかけて、立錐の余地もなく二〇〇名ほどの子どもたちが出席していました。ストーブの熱気なのか、人いきれなのか、空気が薄く思えるほどでした。先生方は人混みをかき分けながら、皆におやつやプレゼントを配っておられました。1

枚の豆カードや、生徒手帳の出席の印鑑が嬉しかった時代です。

時は移ります。オウム真理教事件以来、人々の宗教への漠然とした好意は猜疑心に変わりました。少子化が進み子どもたちの実数は減り、塾や習い事で子どもたちの歓声は街角から聞かれなくなっていました。私たちの教会に長くギデオン協会の聖書配布の奉仕に携わっておられる方があります。中高生で聖書を受け取る生徒も少なくなっているとのことですが、受け取られた聖書がびりびりに破られ、捨てられた話を何度も聞きます。

歪んだこの時代にあって、子どもたちはこの世に生を受けた時から、その影響を受け、傷つき苦しんでいます。幼い子どもたちが親の元にならなから、命が絶たれるという話を聞くたびに心が刺される思いがします。中学1年生の男の子が少年に殺された多摩川の川原を通るたびに目を伏せてしまいます。子どもたちの傷が癒され、苦しみが取り去られるのは牧者なるイエス様の元にしかありません。この時代だからこそ、勇気を持って、希望を持って子どもたちにイエス様を指し示していきましょう。主はあなたへの働きを期待されています。

牧羊者

目次

巻頭言	1
目次	2
教師養成講座「聖書の教える人格教育 第三回 人格教育の方法2」	3
使徒の働き 7/3 ~ 7/10	11
旧約⑦「預言者」 7/17 ~ 8/28	23
キリストとは誰か 9/4 ~ 9/25	65
牧羊ひろば（高松新生教会）	89
カリキュラム	95
「牧羊者」のご購読・ご利用について	96
おわりに	96

〔凡例〕

1. 原語について：ギリシヤ語は〔ギリ〕、ヘブル語は〔ヘ〕、アラム語は〔ア〕で表記しています。
2. 礼拝メッセージ例の最後の「さんび」の略記について
こ：「こどもさんびか」、こ改：「こどもさんびか改訂版」（以上、日本キリスト教
団出版局）、ホ：「教会学校・日曜学校 子どもさんびか」（日本ホーリネス教団出
版局）、イン：「教会学校さんびか」（インマヌエル教会学校部）、ふ：「ふくいん子
どもさんびか」、GS：「ふくいんこどもさんびか2 グローイング・ソング」（以
上、日本児童福音伝道協会）、PW：「プレイズワールド」（リビンググプレイズ）

聖書の教える人格教育

第三回 人格教育の方法2

徳島栄光教会 森沢尚生



聖書には、子供の霊（魂、人格）を神の前に立つところまで導く人格教育（パイディア）が勧められ、それは子供を人格として扱うことから始まりました。そして子供を人格として扱うということは、先ず子供をありのまままで受け入れてあるべき姿に導くことでした。さて今回は、『子供を人格として扱う』と言うことの最も重要な部分を学びます。

一、言うことを聞かない子

筆者の教会の幼児教室では、人格教育を全体のしくみとして実践します。朝、幼児がやってくると、先ず挨拶

をして「どのお仕事をしてもいいよ」と、ありのまま受け入れられます。競争やノルマはありません。子供は教具を用いはじめ、自分なりのやり方を見つけて教具を用いることができるようになります（例えば独^{ひと}楽^がが回せる）。そうして最後に片付けます。すると中には片付けない子、片付けをしる子がいます。「お片付けをして、次のお仕事をしましょう」「お片付けしないと、お母さんは悲しいよ」と、勧められますが、言うことをききません。そこでどうするかというと、「片付けないと机が一杯で、次のお仕事ができないよ」「片付けないと、他の子がその教具を使えないよ」と説得します。しかし、それでも言うことを聞かない子供がほとんどですし、いつま

でも言うことを聞くだけの子供でも困ります。言うことをきかない子をどうやって教育したらいいのでしょうか。

二、褒めて育てる、厳しくつける

世の中で推奨されている方法に、『褒めて育てましょう』という方法があります。これは、片付けない子供に對して、「偉いねえ、お片付けできるもんねえ」と、おだめる。片付けたら、「偉い、偉い、よくできました」と褒めるといった方法です。その反対の方法として対峙する位置に置かれるのが、厳しく命令するという方法です。片付けない子供に對して、「片付けないといけません」と禁止し、それで片付けなかったら、「片付けなさい」と、命令するといった方法です。

おだて、褒めるといった方法と、禁止、命令するといった方法は、一見反対の位置にあるように見えますが、人格教育から見ると、実は、全く同じ位置にあります。おだてて、褒めて教育すると言うことは、『賞』を目当てに行動させることになります。片付けると、褒めてもらえると「言うことを動機にして、子供を行動させているので

す。反対に禁止して、命令するという方法は、『罰』を受けることを嫌がらせて行動させることになります。片付けないと叱られるのを嫌がらせて、子供に行動させているのです。

『賞』や『罰』を用いて行動させる教育は、動物を訓練するのにも用います。犬を訓練するのに、命令を聞いたら、褒めて餌をあげて、聞かなかつたら、たたいて餌をあげないというのと同じです。すなわち、褒めて育てるのも厳しく戒めるのも、子供を人格扱いしておらず、動物扱いしていることになるのです。

三、教えるという事

教えるということ (teaching) には、大まかに分けると、①プログラミング、②トレーニング、③コーチング、④インストラクティングがあります。

また教える内容を分類すると、①行為 (習慣や態度)、②技術 (方法や順序)、③知識 (情報や経緯)、④価値 (普遍的価値や真理) というものに大まかに分類できます。

(1) 行為をインストラクティングする場合、それは示唆になり、コーチングする場合は、説得となります。行為をトレーニングする場合は、命令になり、プログラミングしたら強制となります。行為は、示唆を受けて発見するか、説得されて納得するか、命令されて従うか、強制されて身に付けるのです。

行為		行為	
強制	命令	説得	示唆
プログラミング	トレーニング	コーチング	インストラクティング

(2) 技術をインストラクティングする場合、それは模範となり、コーチングする場合は、解説となり、トレーニングする場合は、訓練になります。しかし技術はプログラミングできません。本人が望まない技術は強制しても身に付きません。技術は、模範を見て発見するか、解説を受けて覚えるか、訓練して身に付けるのです。

技術		技術	
訓練	解説	模範	
プログラミング	トレーニング	コーチング	インストラクティング

(3) 知識をインストラクティングする場合、それは例示となり、コーチングする場合は、教授となります。しかし知識はトレーニングできません。暗唱させて覚えさせることはできても、すぐ忘れ、知識が身についたとは言えません。本人が望めば、知識は教授できますが、望まない知識は繰り返し覚えさせても、強制的に覚えさせても身に付きません。知識は、例示されて発見するか、教授されて身に付けるのです。

知識		知識	
教授	例示		
プログラミング	トレーニング	コーチング	インストラクティング

(4) 価値をインストラクティングする場合、それは奨励となります。しかし価値はコーチングもトレーニング

もプログラミングもできません。価値は、教えられようが、繰り返されようが、強制されようが、本人が発見しない限り身に付きません。奨励されて、挑戦することによって発見するのです。

値	
プログラミング	トレーニング
コーチング	インストラクティング
奨励	

四、人格扱い

では人格教育をする場合、どうしたらよいのでしょうか。例えば赤信号で止まるという行為を教えるとしましょう。この場合、いきなり首根っこ掴んで止める、強制という方法があります。この方法でも子供は赤信号で止まることを学びはします。しかしこの方法だと、子供が一人にいる時には自分で判断しないで、止まらないかもしれません。いきなり強制するのは、子供の自主性を育てようとしておらず、子供を機械扱いしていることになり、人格を育てることにはならないのです。

しかし、強制が教育でないではありません。強制してはいけなとか、強制するのは教育でないというのは間違いです。強制的に止めないと車に轢かれて死んでしまうかもしれません。最終的に言うことを聞かない場合には、強制も必要なのです。

では、「止まりなさい」と、命令するという方法はどうでしょう。この方法は、機械扱いはしていませんが、人格扱いもしません。犬にだってトレーニングして、飛び出さないようにさせます。命令を聞かせるだけの扱いは、動物扱いなのです。子供は、自分から気をつけ、自分で判断し、さらに応用できる人間にならないといけません。命令するだけの教育は、子供を動物扱いにしており、自主性を養わず、人格を育てることができないのです。

では、「赤信号で止まらなさいと車に轢かれる」と、説得するという方法はどうでしょう。この方法は、なるほど子供を人間扱いはしています。しかし、人格扱いではないのです。説得して納得させ、そのとおり行わせるだけでは、言うことに聞かせるだけの奴隷扱いなのです。子供には、自分で気付くチャンスを与えないと、自覚し、

自制しないのです。説得するだけの教育は、子供を奴隷扱いにしており、自覚、自発、自制させず、人格を育てることができないのです。

では、「みんなは赤信号で止まってるね。あなたはどうしたいと思う」と、示唆するという方法はどうでしょう。この方法は、子供に自分で考えて、自分で状況を判断させようとしています。強制されたり、命令されたから、自分の考えではないけれど行動するのではなく、自分で自覚し、自分で判断し、自分で決断して、自分が責任をもって行動するように促されているのです。

人格は、子供の時から人格扱いし、自覚、自省、自制、自発、自学、自己責任を促さないと人格となりません。子供を自立させるためには、自分で考え、自分で判断させる必要があるのです。

さらに、示唆して分らないなら、説得して、説得しても分らないなら命令して、命令しても聞かないなら強制するという順を踏むことが、人格教育です。いきなり強制するなら、それは子供を機械扱いしています。いつも命令ばかりするなら、それは子供を動物扱いしてい

ます。説得するのは人間扱いですが、自分の言うことを聞かせるだけで終わるなら、それは奴隷扱いしているのです。子供を人格として扱うなら、自分で考え、自分で判断し、自分で責任を持つ人間に育てないといけません。そのためには、示唆して自分で気付かせることから始めましょう。示唆して気付かないときに、説得し、説得しても分からないなら命令し、命令も聞かないなら強制するのが人格扱いなのです。

五、聖書の教え

マタイ18・15〜17を開いてください。罪を犯す兄弟に気付いたときどうするかをイエス様が教えてくださいました。

先ず行って二人だけのところで忠告することが勧められています。事を公にしないで、本人が気付いて自ら悔い改めるように『示唆』するのです。

それがだめだった時に、次の方法として証人を連れて説得にあたるのが勧められています。これは自分だけの独り善がりではなく、他の人も罪だと認識していると

『説得』するのです。

それでもだめだった時、公に教会で注意することが勧められています。これは教会が善悪の判断をし、それに従うように『命令』するものです。

それでも駄目な場合、『強制』的に教会員の資格をなくして、異邦人や取税人同様に扱い、善悪の判断ができないう、伝道し直さないといけない人として扱うのです。

イエス様が、人を導く方法として教えられたのも、示唆して気付かせることから始め、気付かないときに説得し、それでも分からないなら命令し、それでも言うことを聞かないなら強制する人格教育だったのです。

六、発見学習

(1) インストラクティングによる発見

行為を教える場合は、先ず教師が示唆し、子供に自覚させて、正しい行為を発見させます。技術を教える場合なら、先ず教師が模範を見せて、子供に模倣させて、技術を発見させます。知識を教える場合は、先ず教師が例

示し、子供に類推させて知識を発見させます。価値を教える場合には、先ず教師が奨励して、子供に挑戦させて、価値を発見させます。これを発見学習と言います。

(2) 価値観を発見し、価値を発見する

価値観には、善悪、清濁といった普遍性が問われるものの、真偽、損得といった正確性が問われるもの、手っ取り早いか手間かといった効率性が問われるもの、危険か安全か、正誤といった適切性が問われるものがあります。

発見学習によって子供たちは、行為、技術、知識、価値を発見すると同時に、その行為が適切か、その技術が効率的か、その知識が本物か、その価値が普遍的かを発見してゆきます。子供たちは、行為を示唆されたとき、危険か安全かとか、正しいか誤りかといった適切性という価値観を発見して、その行為の価値を判断してゆきます。技術の模範を示されたら、手っ取り早いか手間かといった効率性を発見して、その技術の価値を判断してゆきます。知識を例示されたら、真偽、損得といった正確性を発見して、その知識の価値を判断してゆきます。価

値を奨励されたときは、善悪、清濁といった普遍性を発見して、その価値を判断してゆきます。子供たちは発見学習によって、価値観を発見し、価値を発見し、普遍的なものを発見するようになってゆくのです。

(3) 聖書の教える発見学習

聖書には、御言葉によって奨励され、それに挑戦することによって、神の栄光を見るところという記事が多く記されています。

母マリヤは、受胎告知を受けて（ルカ1・30）、「おことばとおりこの身になりますように」と言って挑戦し、救い主をこの世に誕生させました。ペテロは、夜どおし働いた漁の後、イエス様の勧めを受けて「おことばとおり、網をおろしてみましよう」（ルカ5・5）と言って挑戦し、おびただしい魚を捕っています。

み言葉を受け、み言葉どおり挑戦することによって、神の栄光を見るのが信仰生活です。そして、この状況に導く教育が、神の前に立つところまで導く人格教育なのです。行為を教えるのに示唆から、技術を教えるのに模

範から、知識を教えるには例示から、価値を教えるには奨励から始めましょう。すると子供たちは、価値観を発見し、さらに価値を発見し、そのうえ普遍的価値を発見し、目に見えないものに目を置いて、神の国の価値観を発見していくのです。

人格教育は、インストラクティング、コーチング、トレーニング、プログラミングの順番に教育することによって、あらゆる場面で子供を人格扱いすることです。

また人格教育は、発見学習によって、子供たちに価値観と価値を発見させ、さらに神の国の価値観に出合わせ、ついに神の前に立たせるのです。

■付録■ 例題

あなたが子供を連れてマーケットに行きました。子供がおもちや付菓子欲しいと言ひ出し、ごねて聞きました。既に2〜3回買ってあげており、もう必要ありません。あなたは今までなら、どう教育しましたか？ 聖書の教える人格教育を学んだ今なら、どうしますか？

- ① 子供を車に放りこんで帰る。
- ② 子供の手から商品を取り上げる。
- ③ 棚に戻しなさいと命令する。
- ④ 今度買ってあげると約束する。
- ⑤ 叩くよと言って言うことをきかす。
- ⑥ これはお菓子がちよつとしか入ってないと言う。
- ⑦ こないだ買ったばかりだからがまんしなさいと言う。
- ⑧ 本当に必要ですかと言う。
- ⑨ 同じものが家にありませんかと言う。
- ⑩ 買ってしまふ。

『⑩買ってしまふ』のは、教育を放棄しています。こ

れが最も間違つた対処であり、子供の人格を育てる気がないことを表しています。

『①車に放りこんで帰る。②子供の手から商品を取り上げる。』①②は、いきなり強制しています。子供は機械扱いされ、子供の人格は無視されています。

『③棚に戻しなさいと命令する。④今度買ってあげると約束する。⑤叩くよと言って言うことをきかす。』③④⑤は、命令や賞や罰で子供を動かそうとしており、子供を犬猫扱いしています。

『⑥お菓子がちよつとしか入ってないと言う。⑦こないだも買ったばかりだからがまんしなさいと言う。』⑥⑦は、人間扱いしていますが、自分で考えさせていません。

『⑧本当に必要ですかと言う。⑨同じものが家にありませんかと言う。』⑧⑨は、自分で気付かせようとしており、子供を人格扱いしています。しかし⑧⑨で言うことを聞く子ばかりではないでしょう。その時は説得し、それで聞かないなら命令し、それでできないなら強制するという順を追ってください。

聖書 使徒16・6～10 テーマ マケドニアからの叫び

序論

(金井信生)

パウロの第二回伝道旅行は、行こうと思った方向が二度までも聖霊によってとどめられ、前には海しかないトロアスに導かれました。そこで見た幻によって、海を渡り、期せずしてヨーロッパ宣教の第一歩が記されることになりました。

一、行き場がなくなる時

第二回伝道旅行の目的は、第一回伝道旅行で生み出された小アジア地方の諸教会を訪問し、力づけるためでした。デルベ、ルステラと訪問しましたが、(アジアで御言を語れることを聖霊に禁じられたので)、西へ進み、北上しながら小アジア巡回に戻ろうとすると、(イエスの御霊がこれを許さなかった)ので、とうとう小アジアの西端、目の前はエーゲ海というトロアスに着いてしまいました(聖書地図参照)。

文字にすれば数行ですが、この間に一～二週間、あるいはそれ以上の時が経っていたと考えられます。「聖霊

に禁じられた」とはパウロが病気にかかっていたのではないかとの説もありますから、不安や恐れがあったかもしれないかもしれません。しかし、忍耐して主の導きを祈り待ち望むときが、次の大きなステップのために必要だったのです。

二、マケドニア人の叫び

トロアスでパウロは、ひとりのマケドニア人が(マケドニアに渡ってきて、わたしたちを助けて下さい)と懇願する幻を見ました。

パウロがこれまで想定していた伝道の対象ではない、海の向こう側の地域からの招きでした。しかしパウロは、神の招きと確信して、ただちにマケドニアに渡っていく決心をします。

そこには、「わたしにはまた、この囲いにいない他の羊がある。わたしは彼らをも導かねばならない」(ヨハネ10・16)、「あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう」(使徒1・8)など、主イエスのみ言葉の裏付けがありました。

また、救われるべきはすべての人ですが、(ひとりのマケドニア人)の救いを求める声に、パウロは応えていこ

うとします。マケドニア伝道において、ピリピではルデヤという婦人を導いてその家族も救われ、占いの霊につかれた女奴隷に解放を与え、獄屋に入れられますが、獄吏に「主イエスを信じなさい。そうしたら、あなたもあなたの家族も救われます」（使徒16・31）と福音を説きました。

主イエスも、その伝道は一人の悩みを聞き、苦しみに寄り添うものでした。「いなくなった一匹を見つけるまでは捜し歩かないであろうか」（ルカ15・4）と問いかけられたように、苦労や困難が伴うとしても、救いを求める声に応えることが主の御旨の内を歩むことであり、また主の御顔を仰ぎ続けることのできる道、主が共にいて力づけてくださっていることを実感できる生涯なのです。

三、確信に立つ生涯

マケドニアに渡り、ギリシア宣教を始めてからのパウロの働きについて、聖霊の導きを受けていたことが使徒行伝に何度か記されています。第三回伝道旅行の最後には、エルサレムに帰ったら捕らえられることも聖霊に示され、預言者アガボを通して人々からエルサレムに戻ら

ないよう涙ながらの勧告を受けますが、パウロの心は揺るがずに、主の導きだけに従っていきました。

私たちも、自分であれをしよう、ここに行こうとしているときは、楽しいかもしれませんが、思いがけないことで行き詰ると不安でいっぱいになります。

それよりも、主は私をどこに導こうとされているか祈り求めたり、また助けを求めている人、救いを必要としている人はいないか、耳を澄ましたり目を広く向けてみたらどうでしょうか。救いを求める声を聞くと、それは主が私たちを遣わすために届けられた招きの声であり、主から遣わされていく時には、少々の困難があっても、確信をもつて全力を尽くすことができます。

結論

聖書は、イエス様に救われ、共に歩んでくださっている幸いを知る者は、その喜びを伝える使命が与えられていることを教えています。

私たちの周りにいる、救いを求めている人々の声を聞き取り、イエス・キリストに救いがあることをお伝えする者となりましょう。

研究資料

(小平徳行)

宣教は神ご自身が導いて進めておられる。ここは福音が小アジアからヨーロッパ大陸に伝播されるに至った経緯が記されている。この出来事は「人の心には多くの計画がある、しかしただ主の、み旨だけが堅く立つ」(箴言19・21)という真理の実例であった。

テキスト

6 アジヤで御言を語ることを聖霊に禁じられた

パウロ一行はガラテヤ州ルステラを出発しアジヤ州に行き、その中心であるエペソを伝道活動の舞台にしようと計画していたが、聖霊によって禁じられた。それは、心のうちに与えられた衝動であったのか、一行の誰かによる預言的な言葉によったのか、あるいは、何らかの事情で計画通りに行かなかったことを聖霊による禁止と受け止めたのかもしれないが定かではない。この時には禁じられたアジヤ伝道であったが、後に神はアジヤの地での伝道の道を開かれた(19・10)。フルギヤ・ガラテヤ地方、フルギヤはガラテヤ州とアジヤ州に属している。この地名

はフルギヤとガラテヤの二つの地方を意味しているのではなく、ガラテヤ州のフルギヤ地方を指していると考えられる(ラムゼー)。

7 イエスの御霊がこれを許さなかった 禁じたのは6節では「聖霊」、ここでは「イエスの御霊」と表現の相違がある。具体的には何かは分からないが、先の場合とは異なり、イエス・キリストによる介入を意識させられる方法だったのかもしれない。いずれにせよ神がパウロ達を確実に導いておられることを示しており(10節)、この伝道旅行が人知を超えた確かな導きの中で進められていたことをルカは明らかにしようとしている。ピテニヤ小アジア西北にある州で、文化水準の高いギリシヤ風の都市とユダヤ人居留地があった。ペテロは後にピテニヤに手紙を書き送っていることから(1ペテロ1・1)、神は後にこの地にも福音を宣べ伝えさせたことを知ることができる。

8 ムシヤを通過して、トロアスに下って行った 聖霊によって禁じられた結果たどりついたのは、予定外の地であるエーゲ海沿岸の港町トロアスであった。実にルステラからここまでの道のりは約700kmであった。

9 これまでの一連の神の禁止は、積極的な導きに変わる。幻 幻や夢は当時、神が人間と意志の疎通を図るための手段として認められていた。使徒行伝ではしばしば幻によって宣教が展開して行ったことが記されている。幻によって、アナニヤがサウロの回心、召命のために用いられ(9・10～19)、ペテロとコルネリオを通して福音の扉がユダヤ人から異邦人へと開かれた(10～11章)。もし、これらの幻がなかったなら、キリスト教はユダヤ教の一派でとどまっていたかもしれない。このように幻は人間の固定観念を打ち砕き、神のみこころを悟らせるために用いられたのである。ひとりのマケドニヤ人 これがルカであったと断定する資料はない(そもそもルカは異邦人であるが、ギリシヤ人であったという確証はない)。しかし彼はトロアスの地でパウロと出会い、福音宣教に新しいビジョンを与えたという想像はあり得ないことではない。

10 神がわたしたちをお招きになったのだ パウロは即座にこの幻を、マケドニヤに福音を宣べ伝えるようにとの神からの招きであると解釈した。この時、ようやく二度も聖霊に禁じられた意味を理解できたに違いない。確

信して(ギリ)スンビバゾー) 元来「結び合わす」の意味である。9・22では「証明する」という意味で用いられている。この語はいろいろな証拠から一つの結論を引き出すことを表すのに使われる。未知の新しい大陸に出かけて行く事は冒険であったが、パウロにとっては、主から与えられた異邦人伝道という使命(9・15)と一致するものであった。わたしたち ここで突然、語り手が一人称複数形となる。本書ではこのような「私たち章節」がしばしば出てくる(16・10～17、20・5～15、21・1～8、27・1～28・16)。これは著者ルカが一行に加わり、彼が直接目撃した伝道旅行記をつづっている個所であることを示している。ルカはこの時から医者としてパウロの伝道を助けるようになった。ただちに 神の御旨が分かったなら、即座に従うべきことを教えられる。

参考図書 小野静雄「使徒の働き」『実用聖書注解』、斎藤篤美「使徒の働き」『新聖書注解・新約2』(以上のちのことば社)、B・F・バックストン「使徒行伝講義」(バックストン記念霊交会)、I. Howard Marshall, Acts (The Tyndale New Testament Commentaries) 他

聖書

使徒16・6～10

タイトル
暗唱聖句聞こえてますか？ みんなのSOS
マケドニヤに渡ってきて、わたしたちを
助けて下さい。 使徒16・9

目 標

キリストによる恵みを知った者として、
キリストの証人として生きる。

導入

(和田 治)

みなさんは「SOS」っていう言葉を聞いたことがありますか？ 「助けてー！」と言う意味です。SOSを聞いたら何としてもその人を助けてあげなければなりません！ 実は、イエスさまを知らないたくさんの人たちは、すでにイエスさまを信じて救われている私たちに「SOS」を出しているのです。それに応える働きを「伝道」って言います。さあ、今日のテーマは、私たちに与えられたすごく大切な働きである「伝道」についてです！

『ストップ！』って聖霊が・・・

「おかしいな。アジヤの人たちにイエス様による救いを伝えたいのだが」。パウロたちは二回目の伝道旅行に来ていました。一回目の伝道旅行で生み出されたアジヤの教

会を力づけるための旅です。それなのに、不思議なように道がふさがれるのです。祈っても祈っても「ストップ！」と聖霊がお止めになるのです。とうとう、初めに予定していたのとは逆の、目の前にはエーゲ海が広がるトロアスに着いたのです。「いったいどうなっているんだらう。伝道しようとしているのに聖霊がストップっておっしゃるなんて」。一週間も二週間もかけて、パウロたちはひたすら祈りながら進み、やっとここまで来たのです。

マケドニヤ人の幻

その夜、パウロは一つの幻を見ました。幻の中で、海の向こうに住むマケドニヤ人が、しきりに頼むのです。「マケドニヤに渡ってきて、わたしたちを助けて下さい」。うめくように、何度も何度も訴えるその幻は、パウロの心に強く焼きつきました。「みんな！ 海の向こうの人々のところに、主が私たちを招いておられるに違いない！ 彼らが救いを求めて『助けて下さい！』と叫んでいるんだ！」パウロたちは伝道のために海の向こうに渡ることになりました。だって、祈りの中で、神様がそこに導いておられるっていう確信が与えられたのですから！

伝道のための「ストップ！」

パウロたちの歩みから、伝道のために大切な三つの「はてな？」について考えてみましょう。

①「祈っているかな？」

まず、「ばくは、私は、伝道のために祈っているかな？」って問いかけてみましょう。パウロたちには、聖霊が「ストッブ」っておっしゃるのがわかりました。祈っていたからです。海の向こうなんて、行く予定はありませんでしたが、そこに招かれていると確信しました。祈っていたからです。パウロたちは、「伝道は人間のわざではない」、と知っていました。それは「聖霊」の力によるのです。伝道で何よりも大切なのは、聖霊のお導きに従うことなのです。聖霊のお導きは祈っていてこそわかるのですね。

②「助けを求めているのは誰かな？」

マケドニヤ人が「助けて下さい！」って叫んでいたように、私たちの周りでも、「辛いよー、寂しいよー、死ぬのが怖いよー、助けてー！」って誰かが叫んでいます。お友達や家族の誰かの心の叫びが聞こえますか？ あなたの心の耳を澄ませてみましょう。そして、「助けを求めているのは誰かな？」って、祈りながら考えてみましょう。そして、まず「一人」に伝えてみましょう！ パウロが見た幻も、

「一人の」マケドニヤ人だったでしょう？

③「伝道者に選ばれているのかな？」

パウロたちは、イエス様のことを人々に伝えるために、すべてを献ささげて従いました。伝道は、誰も何もしなくても勝手に進む、ということは絶対にありません。機械やロボットにも伝道はできません。神様に従う「人」が必要なのです。もしかしたら、神様はあなたを、パウロのように、イエス様のことをたくさんの人々に伝える働きに用いた、と願っておられるかもしれません。だから、「伝道者に選ばれているのかな？」って考えてみてほしいのです。もし神様から「伝道者にならなさい」って言われたら、「はい、従います」と言えるでしょうか？

まとめ

「伝道」はしてもしなくてもどちらでも良い、というものではありません。SOSに応える働きであり、どうしてもしなければならぬ大切なことなのです。イエス様のことを知っている人だけがイエス様のことを伝えることができます。三つの「はてな？」を忘れず、思い切って伝道しましょう、聖霊の力によって！

♪もちいたまえわが主よ♪ (ホ113)

聖書 使徒16・25〜34 テーマ 信仰による救い

序論

(金井信生)

ピリピの町で投獄されてしまったパウロとシラスですが、獄の中でもイエスに対する信仰を失わないで信頼している二人によって、獄吏一家に救いがもたらされました。

一、救われている人

大地震のあと、獄吏は、囚人たちが逃げてしまったと思いきみ、責任を取って自害しようとしたが、パウロの「われわれは皆ひとり残らず、ここにいます」との言葉にとどめられました。看守は、パウロのもとに来て、ひれ伏し、救いを求めました。それは、鎖につながれてなお、神を賛美し、祈っていたパウロとシラスは、自分とは違う「救われている人」だということに気づいたからです。

獄で鎖につながれたパウロとシラスは、夜中でも賛美の歌を歌い、神に祈っていました。獄からの解放を求めて祈っていたわけではありません。私の信じる神は私を助

けることができます。でも今この状況で助けてくださらなかったとしても、私は神を賛美しますと、既に救われている感謝によって賛美していました。

聖書がいう救いとは、物事が自分の願ったように進み、与えられるということではありません。魂が救われて永遠の命を得、心に希望と平安がある者に変えられるということです。もちろん、救われてからも、恐れや迷いが生じることもあります。ピリピに至るまでのパウロの歩みにも、同労者と意見が食い違って激しく議論したこともあり、また進むべき道がわからなくなって困ったこともあり、また進むべき道がわからなくなって困ったことにつながれています。

神の導きと信じつつ、思いがけない困難に出会っても、神を賛美し、なお感謝し、信頼できるのは、魂の救いを得ているからです。体は鎖に縛られていても、その心は自由に神に向かい、交わっている、これが救われている人の幸いです。むしろ、自由なはずの獄吏のほうが、仕事のことや家族のことなど、いろいろなことで思い悩むことが多く、体は自由に見えても、心はつながれていないのです。

二、救われるために

獄吏の（先生がた（キュリオス）との問いかけに、パウロとシラスは（主（キュリオス）イエスを信じなさい」と答えます。

救われるためにしなければならないことは、善い行いでも、献げ物でもなく、イエスを主と信じることです。イエス・キリストが私のために十字架についてくださり、私に代わって罪の罰を受けてくださったと信じることです。それはイエス・キリストの十字架の死に、罪と死に縛られ苦しめられている私たちへの、神の愛と赦（ゆる）しの恵みが現れているからです。

パウロとシラスは、すでに主イエスを信じています。

そして獄も鎖も妨げることでできない、罪赦された喜びを、また永遠の命への確信と希望を、賛美に表していました。さらに主は、信じて救われた者を用いて、その周囲にも救いを広げていかれます

三、救いの広がり

パウロとシラスだけでなく、他の囚人たちも獄から出て行きました。囚人たちはそれまで獄から解放されることを願っていましたが、パウロたちを通して、もっ

と大事な救いがあることに心が向けられていたからです。

またパウロたちは獄吏のためにもどまりました。当時は、囚人が脱走したら獄吏が代わってその刑を受けなければならぬきまりでした。「自分たちが逃げ出したら、この獄吏はどうなるのだろうか」。パウロは自分を救うことよりも、この獄吏が罰せられないために、また鎖につながれるかもしれない道を選びました。それは、主イエスが全人類の救いのために、あえてご自分を救おうとされなかった、その恵みによって救われていることをおぼえ、感謝しているからです。

結論

自分の周りが変わらず困難な状態にあっても、主イエスを信じるなら、神様に愛され、守り導かれている確信を得ることができ、まず自分自身が変わられていきます。そして、神様から愛されているように人を愛し、赦されたように赦していく時に、主の救いを受ける人が周囲に必ず起こされていき、共に神様を賛美し、喜ぶ幸いに導かれます。主イエスを信じましょう。

研究資料

(宮澤清志)

テキストト

25〜26 度重なるむち打ちと足かせ(23〜24)は、ふたりを苦痛のどん底に追い込んだであろうが、それにもかかわらず、彼らは祈りつつ、主にさんびを歌い続けていた。この時、パウロとシラスとは獄屋の最も奥の部屋にいた(24)。一方、ほかの囚人たちは彼らのさんびに聞き入っていた。この2人の姿は囚人たちを感動させたに違いない。そのようなとき、**突然、大地震が起つ**た。多くの注解者は、この地震をパウロたちの祈りに対する神の応答と見る。

27 物語の焦点は、パウロからひとりの獄吏へと転換する。獄吏の務めは、囚人たちが逃亡しないように見張ることだった。彼は、ローマの軍人として、その義務に対する責任を当局から植え付けられていたことであろう。地震によって床から飛び起きた獄吏は、その責任感から真っ先に囚人の様子を見に行つたのであろう。ところが目にしたのは開け放たれた獄屋の扉であつた。最悪の事態を直感し、直ちに責任をとろうとして自害を企てた。

というのは、ローマ法によると、囚人の脱獄を許した看守は、その囚人に課せられていたのと同じ刑に服することになっていたからである。

28 ところが、獄吏はパウロの声によってその行為を遮られることになる。ある注解者は、囚人全員がそこにいることを、灯りがない中でどのようにして知ることができたのか、あるいは獄吏は自害しようとしていることをどのようにして知ることができたのか、等々様々な疑問を呈している。しかし、そのようなことは聖書の本筋からはずれたことであり、彼の部下が持つていたであろうたいまつ(29)のほのかな灯りによっておぼろげながら見ることができた可能性もあることも含めて考える必要がある。**われわれは皆ひとり残らず、ここにいる** このことばはこの看守を驚愕させた。獄屋の中には、パウロとシラスだけではなく、囚人たちが皆逃亡しないで残っていたのである。看守は、自分の経験では理解しがたい出来事が目の前で起こった事に驚き、次節以降へと展開する。

30 **救われるために、何をすべきでしようか** 大地震という出来事と、2人の従前よりの評判、また囚人たちが

ひとり残らず逃げることはなかったという事実とが結びつき、看守は2人を神の代理人、また魔術師とでも思いこんだのであろう。獄吏の求める「救い」が何からの「救い」かは定かではないが、おそらくはこの出来事を通して彼らの伝える神を受け入れないわけにはいかないと思ったのであろう。獄吏の真剣な求めを感じる。

31 主イエスを信じなさい。そうしたら、あなたもあなたの家族も救われます パウロとシラスは、人がどうすれば救われるかについて、当時の初期キリスト教の信仰告白を反映させ「主イエスを信じる」ことによる、と答えたのであろう。すなわち、イエスを主として信頼し、この方を主と受け入れて自らをささげる必要があるということを語るのである。私たちが常に、そして繰り返し立ち返るべき事は、イエスこそ私の人生の主であるという信仰の告白である。この信仰に立つとき、人は救われる。しかも、このことは自らが救われる道であるばかりでなく、自らの家族も同様に救われる道であることを説く。聖書は家族の大切さ、一体性を強調し、家族全員が救われ、あるいは同じ神を信じることは、当然のことであるとされている(16・15、ヨシユア24・15等)。

32 救われるためには、イエスを主と信じると同時にそのお方を知ることもまた必要なことである。獄吏やその家族に対して2人はキリスト教の教えを語って聞かせた。**神の言** 福音のことである。

33 クリユストモスという古代の名説教家は、「彼は洗ってやり、洗ってもらった。彼はふたりの打ち傷を洗ってやり、自分の罪を洗ってもらった」と語っている。獄吏はふたりを家へとつれてくる前に、おそらく獄内の中庭の井戸で、ふたりの傷ついた身体を洗い、同時にそこで彼の家族共々洗礼を受けたのではないだろうか。なお、家族の受洗は、使徒では他に10・44、16・15にも述べられている。

34 自分の家 刑務所の房の上階にあったのかもしれない。**食事** 喜びの結果としての主の晩餐を意図しての食事であろうし、またキリスト者としての交わりの愛餐の意味をもつ食事であろう。またこの食事は主の聖餐を囲んだのかもしれない。**心から喜んだ** おどりがあって喜ぶ、の意味。

参考図書 I・ハワード・マーシャル「ティンデル聖書注解 使徒の働き」(いのちのことば社) 他

聖書

使徒16・25〜34

タイトル

信仰による救い

暗唱聖句

主イエスを信じなさい。そうしたら、あなたもあなたの家族も救われます。

使徒16・31

目標

主イエスを信じて、救いを頂く者となる。

導入

(水野晶子)

先週、パウロさんとシラスさんは「マケドニアに渡って来て、私たちを助けて！」との幻に、神様に呼ばれていると信じて、マケドニアに渡り、ピリピという町で、イエス様のお話をして伝道しました。するとイエス様を信じて救われる人がおきてきたのです。ところが、パウロさんとシラスさんのことを悪く思う人が、うそを言って訴えたので二人は牢屋に入れられてしまいました。「えっ？ どうして？ なんで？」って思ってしまうよね。みんなだったらこんなときどうするかな？ 「怒る？」「当り散らす？」「泣く？」「叫ぶ？」パウロさんとシラスさんは牢屋でどうしたでしょう。

救われている人

パウロさんとシラスさんは、奥の方の牢屋に入れられ、重い鎖で足かせが付けられ逃げられないようにされています。まるで凶悪犯みたいですね。鞭で打たれた傷だって痛いでしょう。ところが、そんな二人は、神様を讃える賛美を歌い、神様に祈っていました。「神様、早くここから出してください」とだけ祈ったわけではありません。もちろん神様は助け出すことがおできになる方だと信じていました。でも、今、助け出されなかったとしても、神様に救われていることを感謝して、祈り、賛美していたのです。一緒の牢屋にいる囚人たちも、牢屋では聞いたこともない歌や祈りの声に、じっと耳を傾けていました。その時です。がた、がたがたがた、ドーン、ぐらつ、ぐらぐら、大きな音、激しい揺れで牢屋の頑丈な扉もあいてしまいました。「地震だ！」「大変だ！」駆けつけた牢屋番は「もうだめだ、みんな逃げてしまった、死んで責任を取るしかない」と思い込んで、自害しようとした。パウロさんは「私たちはみんなここにいますから大丈夫、心配しなくていいよ」と牢屋番が自害するのをとどめました。囚人たちもパウロさんとシラスさんの賛美と祈りに、この人たちは神様に救われている人に違いないと逃げなかったのです。囚人たちが

逃げなかったことにびつくりして、牢屋番は牢屋の中に駆け込んできました。パウロさんとシラスさんの前にひれ伏して、「先生方、救われるために何をすべきですか？」と聞きました。さあ、救われるためには何かしなければならぬのですか？

救われるために

パウロさんとシラスさんは「主イエスを信じなさい。そうしたら、あなたもあなたの家族も救われます。」と答えました。ぜひ救われたいと願った牢屋番はすぐ二人を家に連れて行き、家族みんなに、救われるために主イエスを信じることを話しました。牢屋番も家族も主イエスを信じバプテスマを受けて、神様を信じて救われたことを心から喜びました。

救われるために、私たちが自分で頑張つて、神様に喜ばれる良いことをしようと努力するのでなく、イエス様が私のために十字架にかかって死んでくださった救い主だと信じることです。ただイエス様を信じるだけでいいのです。パウロさんとシラスさんは鎖でつながれていても、救われているから心は自由でした。賛美し、祈る二人は、囚人たちにこの人たちは何か違うと感じさせ、牢屋から逃げずに

留まりました。この事によってさらに多くの人に救いが届けられていきました。

救いの恵み

向井繁樹君は右足腫瘍という病気になる入院しました。この病気は足がはれ、そのうえ腐るという恐ろしいものです。ある時、クリスチャンのおじさんが見舞いに来て、イエス様の救いについて話してくれました。繁樹君は素直にイエス様を救い主と信じました。病気はどんどん悪くなるばかりです。しかし、繁樹君は、お見舞いに来る人たちに一生懸命イエス様のお話をしました。救われて半年が過ぎたある日、繁樹君はお父さんお母さんに、「ぼくは病気で苦しんでいるけど、もうすぐ、み使いが来て、涙も死も苦しみもない天国へ連れて行ってくれるよ」と、小声で言いました。繁樹君はその日のうちに召されました。繁樹君の死をも恐れない信仰を見て、やがて両親も救われました。(キリスト教例話集より)

主イエスを信じるなら、神様から愛され、守られていることを確信し、周りの人にも救いの恵みが届けられます。主イエスを信じましょう。

♪どうしてかわかるかな♪ (ふ4、PW99、ホ61)

聖書 列王上17・1～16 テーマ 生きて働かれる神

序論

(高橋頼男)

預言者エリヤはイスラエルの王アハブに言います。
「わたしの仕えているイスラエルの神、主は生きておられます」。エリヤのように私たちも、生きて働かれる神を知り、大胆に告白する者となりましょう。

一、祈りに答えられる神(1)

「イスラエルの神、主は生きておられます」。この言葉は、エリヤの生き生きとした信仰を言い表わしています。しかし、この言葉は誰でも言うことができる敬虔な言葉でもあります。生きておられる神をその実質をもって知り、生活の中で生き生きと告白する者でありたいものです。それは、私たちの祈りを通し、祈りに答えられる神を経験することから来ます。その時、私たちはこの言葉を生きた信仰の言葉として大胆に告白することができます。エリヤは、偶像礼拝が国を覆い、イスラエルが主にそむいて御名を汚している現状を憂い、激しく泣いて祈りました。そして、ついに一つの確信を得ます。申命11・

16～17にある神のみ言葉がなされる以外に、イスラエルが主に立ち返る道はないことを知りました。そして、アハブ王の前に立ち「わたしの言葉のないうちは、数年雨も露もないでしょう」と宣言したのです。

「エリヤは、わたしたちと同じ人間であったが、雨が降らないようにと祈をささげたところ、三年六か月のあいだ、地上に雨が降らなかった」(ヤコブ5・17)。信仰は主義・主張や願望ではありません。神との生きた関係であり、祈りを通してのリアルな神経験です。

二、訓練される神(3)

神はエリヤに「身を隠す」よう命じられました。「身を隠すことを学ぶ人だけが、神の権威をもって人の前に現れることができる。…また、その所こそ、神の人がさらにまざる奉仕のために備えられる場所である」(沢村五郎『聖書人物伝』)。神がエリヤを訓練するため、最初に選ばれた場所は、ケリテ川のはとりです。訓練の目的は、神への完全な信頼と服従です。訓練の中心は、ケリテ川の水とからすによって養われることを通し、どんな状況や環境にあっても、神と神の言葉に信頼して、そこに留まり続けることでした。ケリテ川の水は日々枯れてい

き、もはや、あと一すくいの水を残して枯れ果ててしまふところまで来ました。しかしエリヤは、神の言葉に信頼して静かに留まり続けました。決して自分で自分を救うために立ち上がることをしません。まさに水が完全に枯れ果てたその時、主はエリヤに声をかけられました。〈立つてシドンに属するザレパテへ行つて、そこに住みなさい。わたしはそのところのやもめ女に命じてあなたを養わせよう〉。そこに、主の訓練の第二ステージが備えられていました。「不信仰は、神と自分との間に事情を置く。そのため雲を隔てて月を仰ぐように、神を拝することが出来ない。しかし、信仰は、事情と自分との間に神を置く。それゆえどんな事情環境の中にあつてもなお、泰然としていることができる。エリヤは、ただ主の御手に支えられていた」(沢村五郎・前掲書)。

三、養われる神(4〜6)

ヨルダンの東にあるケリテ川の場所は今日明らかではありません。当時も人里離れた所だったでしょう。だれでも、住みなれたところから離れ、寂しい場所に行くことには不安があります。どのようにして生きていくのか、どうして食べていったらいいのか、全く当てがありません。

せん。もしエリヤに少しの躊躇があつたとしても、不思議ではありません。その時、神様は「わたしはからすに命じて、そこであなたを養わせよう」と約束されました。しかし、どうでしょうか。いくら、神様のおことばでも、果たしてからすの養いに身を委ねることなど出来るでしょうか。しかし、エリヤは、神のことばに従いました。それは、エリヤを養うのはからすではなく、(ザレパテのやもめでもなく)そこに遣わされる神であり、自分が告白する生きて働かれる神であると信じたからです。

長く関西聖書神学校の学監、校長代行として勤められた向後昇太郎先生は「伝道者」でした。戦前、戦中、戦後と日本の一番厳しい時代に、ただ生ける神だけを当てに福音を携え、大阪府下、奈良の山村僻地まで先生の歩かなかった地はないと言われます。向後師の座右の銘は、〈かめの粉は尽きず、びんの油は絶えなかった〉でした。

結論

祈りを通して生きておられる神を知り、その神の訓練を受け、生きて働かれる神はまた養いの神であることを知って全き信頼、徹底した服従、思い切った献身の生涯を主にささげましょう。

研究資料

(中島啓二)

預言者エリヤが登場するこの章は、冒頭の宣言(1)と、続く三つのエピソード、①荒野で養われるエリヤ(2～7)、②粉と油の奇跡(8～16)、③やもめの息子の復活(17～24)とから成るが、それらのつながりに目を留めて理解することが必要である。例えば、干ばつを宣言したことがエリヤの荒野行きの必要性を生み、ケリテ川が枯れたことが彼をザレパテへと向かわせる。干ばつはまた食物の不足につながり、それが粉と油の奇跡の前提を生むのである。もちろんそれらのことは偶然の成り行きでそうだったのではない。「主の言葉」(2、8)がエリヤの行動を決定づけ、さらにはエリヤを養うからすややもめさえも(彼らが意識しているかどうかは別として)主の命令に基づいて行動するのである(5、10)。

これら三つのエピソードに共通する問題は死であり、その解決は命である。その答を与えることができるのは「生きておられ」る神(1)以外にない。そのことを、命のない偶像により頼む王や国民に判らせるために、この三年間の干ばつの期間は必要であった。またそれはエリ

ヤの訓練期間でもあった。すなわち、この三つの出来事を通して、エリヤの姿勢は受動から能動へと移っていく。最初は単純に従い、養いを受けるだけであったが、最後は、率先して神に聞かれる祈りをささげたのである。「今わたしはあなたが神の人であることと、あなたの口にある主の言葉が真実であることを知りました」(24)とのやもめの告白は、彼が今や攻撃に転じ、バアルとの公の対決に向かう準備が整ったことを知らせる合図と言える。その中で、ケリテ川からすの養いを受ける従順は、決して次元の低い初歩ではなく、すべての基本となる大切な信仰の土台であったのである。

テキスト

1 テシベびとエリヤ テシベの位置は不詳。エリヤは「主(ヤ)はわたしの神(エリ)」の意で、まさに彼の使命を象徴的に表している。アハブ アハブと妻イゼベルの方針は、バアルを「主」に取って代わるイスラエルの神とすることであった。バアルとは、フェニキヤに由来し、カナン人も崇拜した偶像で、稲妻と雨の神、そして豊穡^{ほうじょう}をもたらす神とされていた。イスラエルの神「アハブは彼よりも先にいたイスラエルのすべての王にま

さってイスラエルの神、主を怒らせることを行った」(16・33)。彼はイスラエルの王であるにもかかわらず、イスラエルの神、主を、自分の神としなかったのである。主は生きておられます 主なる神は「生ける神」であり、ご自身の民の必要に應えてくださるという点において、他のすべての「命なき」神々と根本的に異なる。わたしの言葉のないうちは、数年雨も露もないでしょう 降雨と豊穡は言わばバアルの専門分野であり、この宣言は、バアルへの挑戦でもあった。雨が何年も降らないことは普通ありえないことで、偶然を頼みとするならば、バアルが圧倒的に有利であった。だからこそ、かえって、もしこの宣言どおりになるならば、主こそ神であることがはっきりと示される。19章における有名な対決は、この時すでに始まっていたのである。

3 ケリテ川 正確な場所は不明のワジ(雨期のみ水が流れる谷川)。鳥による荒野での養いは出エジプトの出来事を想起させる(出エジプト16・13)。身を隠しなさい エリヤを敵の手や飢きんから守るためであらう。

4 その川の水を飲みなさい 他の川が干上がる中で、真つ先に干上がるはずのワジに水があることは本来あり

得ないことで、生ける神の力の表れであった。からすワジのような岩場に巣を作り、食物を貯える習性がある。7 しばらくしてその川はかれた 力及ばずということではもちろんなく、計画が次の段階に進むためであった。そしてエリヤはバアルの本拠地とも呼べるフェニキヤに乗り込んでいくのである。

12・16 わたしにはパンはありません… イスラエルへのさばきは異邦の地にも大打撃を与えたが、同時に恵みの御手は異邦の女性にも伸ばされた。しかしまず、それでわたしのために小さいパンを、一つ作って持ってきたさい 自然界(からす)を通して養われる主は、物質(粉と油)をも自在に支配して救いを実現される。主に信頼するならば、イスラエル・異邦人の区別無く主の祝福に与ることができるとある。その信頼の応答に向けて、エリヤはやもめを励ました。『…かめの粉は尽きず、びんの油は絶えない』とイスラエルの神、主が言われるからです すべての根拠は人のわざではなく、主の言葉にある。

参考図書 注解書 S. J. De Vries (Word), R. Nelson (Interpretation), 服部嘉明(新聖書注解 旧約2)。その他 The IVP Bible Background Commentary: OT

聖書

列王上17・1～16

タイトル
暗唱聖句

仕えよう！ 生きておられる主に！
わたしの仕えているイスラエルの神、主
は生きておられます。 列王上17・1

目 標

生きて働かれる神を信じて、神に仕える
者となる。

導入

(和田 治)

皆さんは聖書の神様、この世界を造られた主なる神様について、教会学校で学んできましたよね。じゃあ、もしお友だちから、「聖書に書かれてる神様って、今でもほんとに生きてるの？」って尋ねられたら、どう答えますか？ 今日日は、「私の仕えている主は生きておられます」とはつきり言うことができたエリヤに注目しますよ！

主なる神様は生きておられる

「これからはこの国の神様はバアルじゃ！ 皆、バアルを神として拝め。主なる神など神ではないわ！」大変です。アハブという悪い王様が奥さんのイゼベルと一緒に、偽の神を拝むようにイスラエルの人たちに命令したのです。みんな、石や木でできた、命のない神を拝むようになりますまし

た。もちろん、主なる神様はお怒りです！ そこで、エリヤが預言者として遣わされました。「わたしの仕えているイスラエルの神、主は生きておられます！」

そうです。人間が考えて作ったような、命のない偽物の神とはわけが違います。バアルを拜んでいる人々は、バアルが雨を降らせてくれている、と信じていました。まっさかー！ 雨も太陽も、植物も、この世界のすべては、造り主でいらっしやるまことの神様がお与えくださっているのですよね。生きておられる主なる神様だけが、雨を降らせ、また、命を与え、命をお育てくださるのです。

主なる神様は祈りに答えてくださる

エリヤの心には、昔モーセを通してイスラエルの民に語られた主なる神様の言葉が迫ってきていました。「もし偽の神を拜んだら、主はあなたがたに向かってお怒りになり、天を閉ざされるでしょう。雨は降らなくなってしまうのです。」エリヤは祈りました。「主なる神様、どうかあなたが生きて働いておられることを、人々に分かせてください。雨をとどめてください。そしてイスラエルの民に気づかせてください、あなたこそ生きて働かれるまことの神様であられることを！」そして、エリヤはアハブ王にきっぱりと

7月

17日 礼拝メッセージ例

言いました。「私が何かを言わない限り、ここ数年、一滴の雨も降らず、露も降りません！」

もし、雨が降ってきたら、「やっぱりバアルこそ本物の神様だ」と思われてしまいます。でも、主なる神様はエリヤの祈りにお答えくださり、それからびたつと雨が降らなくなったのです！

ヤコブ5・17にこう書かれています。「エリヤは、わたしたちと同じ人間であったが、雨が降らないようにと祈をさげたところ、三年六か月のあいだ、地上に雨が降らなかった」。エリヤも私たちと同じ人間！ 私たちが信じてお祈りすれば、神様は答えてくださるんですよ！

主なる神様は養ってください

やがて主はエリヤにおっしゃいました。「ここを離れ、東の方に行き、ケリテ川のほとりに隠れなさい。そしてその川の水を飲みなさい。わたしはからすに命じて、そこであなたを養わせよう」。誰だだれって「からす」？ からすになんてまかせられないよ…」って思いますよね。でも、エリヤは、主なる神様のおっしゃるとおりにしました。「生きておられる神様なら、からすを使っても、わたしを養ってくださいるに違いない！」と信じたからです。そして、本

当にからすが毎日朝夕欠かさず、エリヤのところにパンと肉を運んできたのです。すごいですよね！

しばらくして川の水も枯れました。すると主は「ザレバテに住みなさい。そのやもめ女に命じてあなたを養わせよう」とエリヤに語られたのです。そして、その町の貧しいやもめのために、「かめの粉は尽きず、びんの油は絶えない」とエリヤに約束なさいました。不思議なことに、どんなに使っても、そのやもめのかめの粉も油もなくならないではありませんか！ そうして、彼女を通してエリヤを養ってくださいたのです。同じように主なる神様は、信じる私たちの心も身体もたましいも、ちゃんと養ってくださるのです。嬉しいですね！

結び

命のない偽物ではなく、生きて働かれる主を信じるって、すごいことですね。主なる神様は私たちの祈りに必ず答えてくださいます！ だって、今も生きて働いておられるんですもの！ エリヤがこのお方にお仕えたように、私たちもお仕えしましょう。主を信じてまっすぐに従い、主が願って下さる道を歩みましょう！

♪まことの神さま♪（イン3、ホ12、ふ67）

聖書 列王上18・20・40 テーマ 神のための戦い

序論

(高橋頼男)

エリヤは偶像礼拝に落ちたイスラエルを目覚めさせ、彼らを偶像崇拜から救い出して主に立ち返らせるために一人立ち上がりました。そして、カルメル山に全イスラエルとバアルの預言者450人、アシラの預言者400人を集めるよう、アハブに言いました。そこに祭壇を築いていけにえをささげ、主が神かバアルが神か、火をもつて答える神を神とするという戦いをしかけたのです。その結果、エリヤの祈りに答えて天からの火が下りました。それを目の当たりに見た民はひれ伏し「主が神である。主が神である」と言つてバアルを捨て主に立ち帰りました。エリヤは、バアルの預言者を捕え、キシヨン川に連れ下つて殺しました。刑罰の厳しさは罪の深刻さでした。

一、よろめく民の前に一人で立つ(21)

エリヤは民の前に立ち、「あなたがたは、いつまでどっちつかずによるめいているのか。もし主が神であれば、それに従い、もし、バアルが神であれば、それに従え」

(新改訳)と言いました。エリヤの戦いと挑戦はアハブやイゼベル、バアルの預言者たちに対してだけでなく、よろめく民に対してなされています。民はバアル礼拝を行いながら、自分たちの神、主を捨てたという意識がありません。バアルにもいけにえをささげていただけのことでした。しかし主とバアルの両方に仕え、バアル礼拝に抵抗せず、排除しないことは主に仕えていないことです(マタイ6・24、ヤコブ4・8、1ヨハネ2・15)。

今日も、同じ戦いが迫っています。私たちにとつて最も深刻な問題は異教や異端との戦いではなく、私たちのキリスト信仰や教会の中にいつの間にか「混淆主義」^{こんりゆう}が入り込んでいることです。クリスチャンとクリスチャンでない人との生活や行動に何の違いもなければどうでしょう。この世の性の混乱が教会に入ってきています。権力に迎合し、世の成功に感嘆し、大量消費に呑みこまれ、「貪欲」というバアル礼拝がクリスチャンや教会の中まで入り込んでいます。いつの間にか当たり前になつてしまった(クリスチャンとして本来ありえない)習慣や判断が教会の中で見うけられないでしょうか。私たちは、私たちを取り巻く文化の流れにいつの間にか

取り込まれてしまっているのです（ヘブル2・1）。

エリヤは、「主もバアルも…」ではなく、「主が神か、バアルが神か」、迷っている神の民にはつきり突きつけて戦いました。迷いよるめいているすべてのイスラエルの前に戦いを挑むエリヤは、自分で行っていることが主のみ言葉と確かな臨在の中でなされていること、神の干渉と見守りの中に置かれていることを完全に信じて立っていました。何と驚くべき信仰でしょう。この時代の中で、神のみ言葉に固く立ち、生活と行動においてぶれない信仰が教会に必要とされているのではないのでしょうか。

二、壊れている祭壇を繕う（30）

エリヤは、この戦いにおいてまず、壊れている祭壇を繕い築き直しました。「壊れている祭壇」とは、主の民が主への礼拝をものはや失っている姿、崩れていた神礼拝の姿です。形式信仰や形式礼拝のみが残り、全てに命が失われていました。生きた神礼拝の回復こそ最優先されるべきことです。私たちは自分の信仰を主のみ前に吟味し、デボーションや礼拝生活が祝福され、本当に命あるものとなっているか主の前に問い直しましょう。壊れている祈りの祭壇を築き直すことから始めなくてはなりません。

エリヤは十二の石で主の名によって祭壇を築き、主の民が神の選びと契約による存在であることを改めて確認しました。教会がみ言葉によって整えられることです。祭壇の上に雄牛が備えられ、その上に大量の水が注がれました。自然的、人為的なあらゆる可能性を防ぎ、ただ神のみわがが現れるために備えがなされました。

三、天からの火を求める（36～37）

エリヤは民を自分のそばに近寄せ、神の前に進み出て「主よ、わたしに答えてください」と訴えました。この戦いはエリヤの野心や自己中心の思いではなく、迷っている民に、主が神であり、エリヤが神の僕であってすべてが神の言葉に従ってなされたことが明らかにした。祭壇の上に天からの火が下ったことを目の当たりに見た民はひれ伏し、「主が神である。主が神である」と言いました。神が信仰の祈りに答えられる生ける神であり、また、イスラエルが本来この神の所有の民であることが明らかになったのです。

結論

神のためみ言葉に堅く立ちましょう。主は、主と教会のために立ち上がる人を求めておられます。

研究資料

(小平徳行)

「数年雨も露もない」とエリヤによってアハブ王に宣告された神は、それから三年目になる時に、雨を地に降らせることをエリヤに予告された。そのためにアハブに会うように命じられる。それは再び雨が降るようになるためには民の悔い改めが必要であったからである。そこで主こそ真の神であることを示すための対決をすることになった。

テキスト

20 カルメル山 現在のハイファ南方で、エスドラエロンの谷から地中海の端まで南東から北西方向に伸びる約32 kmの長さの峰。標高約600 m。

21 あなたがたはいつまで二つのものの中に迷っているのですか。主が神ならばそれに従いなさい イスラエルの民は主を捨てたというつもりはないが、バアルにもいけにえをささげていた。つまり主とバアルの両方のために場所を作ろうとしていたのである。しかし「ふたりの主人に兼ね仕えることはできない」(マタイ6・24)。それゆえエリヤは何に従うべきかを考え、決断するように

挑戦したのである。これは妥協を許さない提案であった。

22 わたしはただひとり残った主の預言者です。しかしバアルの預言者は四百五十人あります この時のエリヤはひとりであることを全く恐れていなかった。彼は真の神に仕えているのであり、その神が用いられるならば敵が何人いても問題ではない。

24 そして火をもって答える神を神としましょう 神はこれまでも火を下してこられた(レビ9・24、士師6・21、歴代上21・26、歴代下7・1)。神は焼き尽くす火である(ヘブル12・29)。エリヤは、神は昔も今も変わらないうことを信じて大胆な態度をとって神を証しようとした。それがよくろう バアルは太陽神であり、熱はその要素であるから、この提案はバアルを拜む者にとって受け入れずにおれないものであった。

26 28 バアルの預言者は激しく叫び、身を傷つけることとまでした。彼らの頼みは、自分たちの熱心さであった。29 顧みる者もなかった 何の兆候もない事を意味する。

30 こわれている主の祭壇を繕った ここに主を礼拝し

なくなっている民の姿が反映されている。かつては北イスラエルの中で神に忠実な人々が、この祭壇で礼拝をさげていたが、アハブとイゼベルの支配の下で自分たちの礼拝をささげることが許されなかったのかもしれない。祭壇を繕うこと、つまり礼拝の回復が、神のみわざのためにまず必要なことであった。

31 十二の石 現在の分裂状態を悲しみ、部族の一致を願われる神の願いを象徴する。

32 種二セヤをいれるほどの大きさ 1セヤは約7.3リットル。おそらく祭壇の周りの溝の幅を意味しており、90cmそこそこのことであろう。

33 34 四つのかめに水を満たし、それを燔祭とたきぎの上に注げ 神のみわざ以外による自然発火、または何らかの人為的なわざによる発火のあらゆる可能性を徹底して防ごうとした。またこれは主の御力に対するエリヤの確信を示すものでもあった。

36 39 夕の供え物をささげる時になって エリヤは普段の礼拝の方法に準じて行った。わたしがあなたのしもべであって、あなたの言葉に従ってこのすべての事を行ったことを、今日知らせてください ここまでの一連

の出来事は、すべてエリヤではなく神が計画されたことであつた。そしてエリヤは自分がしもべであつて、主人の意思に従い、主人の手の中の道具にすぎない者であることを表明している。彼は主にすべて明け渡し、ゆだねていたのである。主よ、この民にあなたが神であること…を知らせてください エリヤは単に主が神であることを奇跡によって実証することを祈り求めただけでなく、イスラエルの回心を求めた。主が神である この民の承認の言葉自体がエリヤの祈りの答えであつた。

40 バアルの預言者たちを殺したのは気まぐれになされた残酷な行為ではなく、偽預言者に対して律法で命じられていることに従ってなされた必要な懲罰であつた（申命記13・5、13 18）。この罪がいかに深刻であるかを示している。

参考図書 久利英二「列王記」『実用聖書註解』、舟喜信『新聖書講解・列王記』、ドナルド・J・ワイズマン『ティンデル聖書注解・列王記』（以上のちのことば社）、ハーヴェー・E・フィンレー「列王記第一、第二」『ウエスレアン聖書注解・旧約篇2』（イムマヌエル綜合伝道団）、他

聖書

列王上18・20～40

タイトル

信じて、祈って、いざ、勝利！

暗唱聖句

火をもって答える神を神としましょう。

列王上18・20

目 標

神のために信仰をもって戦う者となる。

導入

(和田 治)

「教会学校に来ている時には神様にお祈りをして、み言葉を信じているけど、普段の生活は、神様を信じていない人たちとなくんにも変わらない…」。皆さんの中にそんな人はいますか？ せっかく神様がいつも一緒に居てくださるのに、それじゃあ残念ですよね。勇気をもって神様のために戦ったエリヤに、今日も注目しましょう！

カルメル山に全員集合！

「アハブ王よ！ イスラエルの全国民と、バアルの預言者四百五十人、それにアシラの預言者四百人を、カルメル山に集めなさい！」エリヤの言葉に王はカンカンです。「おのれ、生意気なやつめ！ 今度こそエリヤを倒してやるうー！」カルメル山の頂は大騒ぎ！ イスラエルの民やバアルの預言者たちでこった返しています…。エリヤは語り

かけました。「イスラエルのみんな。いつまで、迷っているのだ？ 私たちの主がほんとうの神様なら、このお方にこそ従うべきではないか！」

火をもって答える神こそ…

バアルか、主なる神様か… いったいどちらが本物なのか、エリヤははっきりと示そうとしています。その方法はどうでした。一頭の牛を切り裂き、たきぎの上に載せます。もちろん火をつけません。「あなたがたはあなたがたの神の名を呼びなさい。わたしは主の名を呼びましょう。そして火をもって答える神を神としましょう！」。

さあ大変です！ なんてったって、バアルの預言者は450人もいるのです。でも、イスラエルの神を信じる預言者は、エリヤたった一人だけ…。大丈夫でしょうか？

「バアルより、おおお、バアルより！ どうかお答えくださーい！」朝から昼まで叫び続け、踊り続けたバアルの預言者に、誰からも、何の答えもありません。「おやおや、あなたがたの神は考えごとでもしているのかな？ 旅にでもお出かけかい？ ひよつとしてお昼寝中じゃないのか？」エリヤの言葉にますますむきになって、彼らは刀とやりで自分たちのからだを傷つけ、血をだらだら流しまし

た。そんな激しい祈りにも、何の答えもないのです。ああ、人間が作った偽物の神様を拜むって、なんてむなしいことなんでしょう…！

火は下るのか？

いよいよエリヤが祈る番。皆を近くに呼び寄せ、こわれていた主の祭壇を、丁寧に築き直しました。次に、祭壇の周りに深いみぞを掘ったのです。たぎぎを並べ、牛を切り裂いてたぎぎの上に載せた上で、命じました。「四つのかめに水を満たして、燔祭とたぎぎの上にたつぷりと注ぎなさい」。エリヤの指示で、なんと、三回も水がかけられました。祭壇の周りもみぞも、水びたしです！そこでエリヤは祈りました。「主よ、私の祈りに答えてください！ここにいる皆が、あなた様こそ神であることをはっきり知ることができるようにしてください。人々があなたのもとに帰ってくるができるよう、どうか、私の祈りにお応え下さり、火を下してください！」

そのときです！「ゴォッー！」突然、天から主の火が下り、いけにえや祭壇を全て焼きつくし、みぞの水もすっかり蒸発させたのです。何ということでしょう！皆びっくり！ひれ伏して叫びました、「今こそ分かりました。

主こそ神です。主こそ本物の、唯一の神様です！」。

信仰の戦い

主なる神様を心から信じるエリヤは、信仰の戦いを戦い抜き、勝利しました。実は、皆さんにも「信仰の戦い」の場面があります。悪いことをしている人がいても、いじめっ子やいじめられっ子がいても、知らん顔、関係ない…。先生に見つからなければ、みんなやっていることなんだから、ちよつとくらいいいことをしたって嘘をついたってへっちゃら…。これでは、バアルの神と主なる神様と、どっちつかずで迷いながら罪を犯していたイスラエルの民と変わリません。あなたが本気で神様を信じて祈るなら、神様は答えてくださいますよ！主なる神様のために信仰をもつて闘うエリヤのようなクリスチャンになりましょう。信仰の戦いに勝利しましょう！

結び

エリヤが祭壇を築き直したように、私たちも信仰をもつて祈りましょう。罪を悔い改め、「主よ、あなたに従い続けることができるよう、助けて下さい！」って。自分の力ではなく主の力でこそ、勝利できるのですから！

♪主のパワー♪ (GS 36)

聖書 列王上19・1～18 テーマ エリヤ③ 励まし力づける神

序論

(石田高保)

神の国は自己責任がすべてではない。神様のふところ
広い配慮によって支えられていることに目を留めたい。

一、神の配慮

エリヤはカルメル山での戦いに勝利し、偶像の預言者
たちを根絶やしにした。このことが王妃イゼベルの耳に
入ると、彼女はエリヤを暗殺するように命じる。これを
知ったエリヤはほうほうのていで逃げ出し、荒野の奥に
隠れた。ほんの少し前にはエリヤが祈ると天から火がく
だつていけにえを焼き尽くし、彼が祈ると3年半も雨が
降らなかったのにイスラエルに大雨がくだった。イスラ
エルにとってエリヤは大恩人であり、英雄であるはずな
のに、まことの神をかたくなに拒むイゼベルによって、
エリヤは殺されそうになる。これに対してエリヤは神様
に泣きつく。なぜこれほど理不尽な目に遭わなければな
らないのですか、もうこれ以上任務に耐えられませんか
ら私の命を取って下さい、と。彼は命がけの預言者の働

きを長い間続け、緊張の連続であつたため、ついに燃え
尽きてしまったわけである。彼はあきらかに混乱してい
る。また「なぜ自分ばかりが辛い思いをしなければなら
ないのか」という自己憐憫も見られる。あの大預言者エ
リヤもいわば過労死寸前であつた。

身近にこのような経験はないだろうか。そのとき神は
天使を遣わして彼を慰めて下さった。なんとところ温ま
る光景であろうか。(彼は食べ、かつ飲んでまた寝た)、
神のおもてなしはなんと行き届いたものであろうか。こ
うしてエリヤはよく食べ、よく眠って元気を完全に取り
戻した。その勢いをもって神に指定されたホレブという
山まで40日間歩き続ける。

エリヤの受けた神のおもてなしは、誰でも受けること
ができる。それはピンチの中で神の助けを経験するとい
うこと。「あなたはわたしの敵の前で、わたしの前に宴
を設け、わたしのこうべに油を注がれる。」(詩篇23・5)、
敵とは、難しい人間関係というだけでなく、仕事上の問
題、病气、経済問題、将来への不安なども指す。そのよ
うな逆境にも、いや逆境だからこそ神の助け、おもてな
しは付きまとう。「命のある限り恵みと慈しみはいつも

わたしを追う」(詩編23・6、新共同訳)。

二、新しい使命

エリヤはホレブの山に着き、その洞穴に滞在して神の言葉を待ち望んでいたそのとき、神の声が臨んだ。(エリヤよ、あなたはここで何をしているのか、すると彼は自分がどれほど預言者として頑張ってきたか。それにもかかわらず追いつめられて殺されそうになりましたと神に訴えている。そのあと彼は神のリアルな臨在と声に触れて畏れおののく。そして神から新しい使命をいただく。それはスリヤとイスラエルに新しい王様を任命することと、エリヤに代わってエリシャを預言者に任命すること。さらにまことの神に仕えるイスラエル人を7千人も隠していたことも知らされる。もう自分一人で踏ん張らなくてもよいことがわかり、どんなにか勇気づけられたことだろう。

ここに人を回復して用いる主のご計画を見ることができる。イエス様を受け入れた人は、文句なしに新しく創造された者。しかも「わたしたちは神の作品であって、良い行いをするように、キリスト・イエスにあつて造られたのである」(エペソ2・10)。良い行いとは、人によってそ

れぞれ違うが、神は私たちを大いに用いようとしておられることには違いがない。また主は「地の塩、世の光になれ」とは言わず、「あなたがたは地の塩である、世の光である」と言い切っている。どこで輝くのだろうか。教会だけでなく、ほとんどの時間を過ごす生活の現場で輝くことではないか。どのように輝くのか。それは詰まるどころ「自分を愛するように隣人を愛すること」。じつくりと人の話に耳を傾ける。未信者時代がどうであつたかは関係ない。自分がどんなクリスチャンであるかも神は私たちほど気にしていないのかもしれない。神は隣り人を愛することによってキリストを証しする私たちを必要としておられる。私たちがイエス様と共に光の中を歩み、キリストの血潮を仰いで生きているならば、神はどのようにでも私たちを用いて下さる。ゆめゆめ、自分の内側を整えるまでは、神は用いて下さらないなどと考えないようにしよう。

結論

悔い改めるべきは悔い改めたら、あとは荒削りのままでいいから、この私を神と隣り人のために用いて下さいと自分を差し出そう。さて神さまがあなたに与えておられる使命は何だろうか？

研究資料

(小平徳行)

エリヤはカルメル山での勝利の後、イゼベルの脅しに恐れ、弱り果ててしまった。しかしそこからエリヤは主との交わりによって回復し、立ち上がる。聖書は神に用いられた人の弱さをさらけ出し、同じ弱さをもつ私たちに貴重な教訓を与える。

テキスト

1〜2 エリヤの真の相手はアハブでなくイゼベルであった。彼女はアハブに嫁いで以来、イスラエルをバアル化することに使命感をいだき、アハブを指導してきたのである。

3 **ベエルシバ** ユダの最南端の町。エリヤは北イスラエルから逃れて、安全圏へと逃げようとした。

4 **れだまの木** 「えにしだの木」(新改訳)。シナイ半島から北にかけてよく見られる美しい花の咲く、まめ科の木。約3mの高さになる。今わたしの命を取って下さい。主に責任の解除を願っている。前章での華々しい勝利にもかかわらず、事態が改善されず、戦いが先鋭化されているように感じ、霊的にも、肉体的にも激しく疲

勞したのであろう。先祖にまさる者ではありません 勝利が主のわざであったことを忘れ、これからも自分次第だと思いうえに、人間同士の相対的な比較によって自分を見ている。

5 エリヤを召された方は、彼以上に、置かれている状況をご存じである。この時、彼にとつての第一の必要は、主の前に重荷をおろし、休息を取ることであった。

7 疲れているエリヤへの神のお取り扱い、配慮に満ちている。道が遠くて 新改訳では「旅はまだ遠い」。今は、旅の途上である。この時、エリヤ自らが逃避したのであるが、主がご自分の主権によって導いている。

8 **神の山ホレブ** ホレブは神の山であり(出エジプト3・1)、モーセが神から律法を与えられた山(申命記4・10〜15)。ベエルシバの約400km南方にある。シナイと言われることもあり、聖書では特に区別されずに使われているように思われる。ここは神の臨在の示された場所であり、神との契約の原点である。エリヤはここで、主のみこころを確認しなかったのであろう。四十日四十夜長い時間を指す。モーセの四十日間を暗示している。ホレブ(シナイ)は両者にとつて啓示の山であった。

9 あなたはここで何をしているのか この問いかけは、神が個人に対し、自分の立場を見つめ直させるためのものである（創世記3・9参照）。それは暗に叱責を含むが、その時の思いを告白させる働きもしている。

10 ただわたしだけ残りましたが エリヤは目に見える現状を見て、恐れ、不満、自己憐憫に陥った。主のご計画は忍耐と忍苦によって推進される。エリヤはこれを学ぶ必要があった。主の戦いにおいては、敵の脅しよりも自分自身の不信との戦いに勝つことが最も大切である。

11 これらの現象は主が全地の主であることを明らかにするものであった。しかし、これらは神が言葉によって語られるほどには、神の使信のすべてを伝えているものではない。

12 静かな細い声 主は全能のお方であり、語られるお方である。この声自体は答えではないが、主の声に聞こうとすることが大切な事である。

13 顔を外套に包み エリヤは神を見て、なお生きていくことはできないと思ひ、顔を覆った。

15〜16 主は意気消沈した預言者に新しい務めを与え、歴史を支配される神の器としての役割に帰らせた。ハザ

エルに油を注ぎ、スリヤの王としなさい これはイスラ

エルに脅威を与えるために異国の王を立てる事であった。実際にはエリシャが関わることになる（列王下8・7〜15）。油を注ぐ（^ハマーシャハ）ことは、王権あるいは祭司職の後継者としての承認または権威の付与を意味する。ニムシの子エヒウに油を注いでイスラエルの王としなさい これもエリシャの時代になされた（列王下9・1〜10）。エヒウはアハブ家を滅ぼす役割が与えられ、それを果たした（列王下10・9〜11）。アベルメホラ

ギデオンの勝利の舞台（士師7・22）でヨルダン峡谷のベテシヤンの16km南方に位置した。エリシャ 「神は救う」の意。彼はエリヤの後継者として神の意志を実現することに関わった。人の働きには終わりが来るが、主の働きは継承される。

18 わたしはイスラエルのうちに七千人を残すであろう この人々は恵みの選びによって残された者である（ローマ11・1〜5）。これは孤独と不安の中にあるエリヤへの励ましであり、神はご自分の民を決して見捨てられないことを示している。

参考図書 7月24日分と同じ。

聖書

列王上19・1-18

タイトル

失意からの回復

暗唱聖句

出て、山の上で主の前に、立ちなさい。

列王上19・11

目標

失意の中にある者を回復させてくださる神を覚え、神の前に出る。

導入

(土屋開夫)

毎日暑いですが、みんな元気ですか? 「暑くて暑くて食欲が出ないー。夜も眠れないー」なんて子はいませんか? 夏は特に体力が奪われるので、よく水分をとって、よくご飯を食べて、よく寝る事が大事なんですよ。

いいですか、よく覚えておいてください。人間は無敵のスーパーヒーローではないのです。体のエネルギーも、心のエネルギーもそんなにいっぱいはありません。だから子どもでも大人でもどんな人でも、ずっと頑張りとエネルギー切れになってしまうのです。あのエリヤさんでもそうだったんですよ。

大活躍の後のエリヤさん

先週は預言者エリヤさんが大活躍をしましたね。本当の神様ではない「バアル」という偶像に仕える預言者450人を相手に、エリヤさんはたった一人で信仰の対決をしました。その結果、本当の神様がエリヤさんの祈りに火をもって答えて下さり、エリヤさんはバアルの預言者を打ち倒しました。見事な大勝利でしたが、全力での真剣勝負でしたから、きつとエリヤさんは体も心もエネルギーを使い切ってしまった事でしょう。

そしてその後には、三年間も降らなかった雨をもう一度降らせて下さるように、神様に一生懸命祈り続けました。はじめはちつとも雨が降りそうに無かったのですが、エリヤさんは七回も必死に祈ったのです。これも信仰と忍耐のエネルギーがとても必要な事でした。

心が疲れ、恐れるエリヤさん

そのようにエリヤさんは神様のために体と心と信仰のエネルギーを使い切って、本当に疲れていたでしょう。その時、悪いアハブ王様よりもっと悪い奥さんの「イゼベル」が、エリヤさんに言葉を伝えました。その内容は「エリヤめ、よくもよくも…。明日、お前を絶対に殺して

やる！」まるで恐ろしい魔女か鬼ババのような言葉に、エリヤさんは背筋がゾゾゾ…とするほど恐くなり、遠くに逃げ出しました。

エリヤさんはあのモーセさんと並ぶ程の、立派な神のしもべです。でも最初に言ったように、どんな人でも疲れ果て、弱り果て、怯えきつてしまう事があるのです。そんな時、私たちに必要な事はなんだと思いますか？（子ども達に聞いてみる）それはよく栄養をとる事と、よく寝る事と、そして何より神様の前に出る事です！

神様の優しい愛情

エリヤさんはまるでお母さんの膝の上で泣く子どもの様に神様に祈りました、「主よ、もはや、じゅうぶんです。今わたしの命を取ってください。わたしは先祖にまさる者ではありません」。つまり、「神様、もう嫌です。たくさんです。もう疲れ果てました。死にたいです。私はそんなに強くないんです」と、自分の弱さをありのままに出して祈ったのです。

そのエリヤさんに、神様は焼き立てホカホカのパンを下さいました。「あったかいだから」。そして命の水も。食べた後はまたグッスリ眠りました。そしてまた起

きて食べ、そうしたらだんだん元気が出てきました！

そしてエリヤさんは遠くの山まで行つて、改めて神様の前に出て、またありのまま祈りました。「私はあなたのために、一人ぼっちで頑張ったんです。仲間もないんです。それに『殺す、殺す』って言われるんです」。神様はそんなエリヤさんに「男のくせにメソメソするな、バカもんつ」と厳しく叱られたでしょうか？ いいえ、強い風でも地震でも火でもなく、「火の後に静かな細い声が聞えた」（12）とあります。神様は静かな優しい声で「あなたは決して一人じゃないよ」という励ましを与えられたのです！

まとめ

あなたも学校や色々な所で、助けてくれる友達もなく一人で我慢して頑張っている事があるかも知れません。その時は、あなたを愛している神様とイエス様の前に、ありのままの気持ちで祈ってみてください。やがて必ず心の奥に慰めと元気をじわじわ与えてくださいますよ！

♪わすれないで♪（ホ73）

聖書 列王下5・1～14 テーマ 大勇士の癒し^{いや}

序論

(高橋頼男)

スリヤのナアマンは、大勇士で王にも絶大な信頼を置かれる偉大な將軍でした。しかし、彼には隠れたところに大きな悩みがありました。それは、重い皮膚病にかかっていたことです。これまで、さんざん治療のために手を尽くしましたが、一向によくありません。ナアマンの家には奴隷となっていた一人のイスラエル人の娘がいました。彼女はナアマンの悩みを気の毒に思い、イスラエルには重い皮膚病をいやすことができる神の預言者がいることを語りました。そのことを伝え聞いたナアマンは、さっそくスリヤ王に許しを願い出しました。そして、イスラエルの預言者に会うために王の親書と多くの贈り物を携えてイスラエルの国にやってきました。

一、ナアマンの悩み(1)

〈彼は大勇士であったが、重い皮膚病をわずらっていた〉のです。ナアマンは、表向きは立派な鎧^{よろい}を身に纏^{まと}う大勇士でしたが、その中身、身体は重い皮膚病をわずらっ

ていて、肉はただれ、腐っていたのです。その病は彼がどんな医者にかかり、どんな薬を用いて治療を試みても治らない業病のように厄介な病気でした。だれでも、隠れた内面の悩みというものがあります。自分で隠しているけど、内面は人前にはとてもお見せできないものです。しばしば自分自身を打ちのめし、痛めつけ、苦しみ貫く問題です。私たちも、そのような内面の悩みを抱えていることがないでしょうか。私たちの罪(肉)の問題は、さしくそれです。ナアマンが抱えていた内なる悩みは、私たちが抱えている罪の問題、醜い肉の姿ではないでしょうか。罪は自分では解決できません。何度も試みて失敗してしまいます。肉の問題は、自分の内にさらに深くしみ込み、食い込む内面の問題です。

「わたしは、なんというみじめな人間なのだろう。だが、この死のからだから、わたしを救ってくれるだろうか」(ローマ7・24)と、私たちもパウロと共に叫んだことはないでしょうか。この罪は伝染し、私たちを破壊し、やがて死に迫りやる業病です。「罪の支払う報酬は死である」(ローマ6・23)。この問題の解決はどこにあるのでしょうか。

二、イスラエルには神の預言者がいる(3)

「ああ、御主人がサマリヤにいる預言者と共におられたらよかったでしょう。彼はその重い皮膚病をいやしたことでしょう」。イスラエルから捕えられてきた一少女の言葉は、病に苦しむナアマンにとって暗闇に差し込む光、「福音」そのものでした。なんとしても、どんなことをしても、その神の預言者のところに行つて、親しく出会い、患部に手をおいてお祈りしてもらつて癒していただきたいと切に願ひ、決心してイスラエルにやつてきたのです。「イスラエルには、病を癒す神の預言者がいる…」との一人の小さな者の証しが、大きな働きをなしました。

三、行つて七たび身を洗いなさい(10、14)

神の預言者をようやく探し当てたナアマンは、家の門口に立つて、はるばる訪ねてやつてきた目的を告げます。しかし、取り次ぎのしもべが顔を出すのみで、神の預言者(エリシャ)は会つてくれません。ヨルダンに身を浸し、七度そうしなさいと伝えるのみでした。ナアマンは、怒り心頭です。スリヤの偉大な大勇士である自分がわざわざ王の親書と贈り物を携えてイスラエルにまで来ているのに…。怒つて去ろうとするナアマンにしもべたちが言

いました。「預言者があなたに、何か大きな事をせよと命じても、あなたはそれをなさらなかったでしょう。まして彼はあなたに『身を洗つて清くなれ』と言うだけではありませんか」。そこでナアマンは下つて行つて、神の人の言葉のように七たびヨルダンに身を浸すと、その肉がもとにかえつて幼な子の肉のようになり、清くなつたのです。謙遜と謙りをもつてみ言葉に従ひ、水の中に下つていき、その病によつてただれた身を水に浸すのです。自分が、癒し難い罪をその身に負うものであることを認め、キリストの死と葬りのバプテスマにあずかり、共に死に、共に生きるといふ恵みに思い切つて浸されましょう。キリストの血^ちのきよめ^{あずか}に与りましょう。

「御子イエスの血が、すべての罪からわたしたちをきよめるのである」(Iヨハネ1・7)。

「心はすがれて良心のとがめを去り、からだは清い水で洗われ、まごころをもつて信仰の確信に満たされつつ、みまえに近づこうではないか」(ヘブル10・22)。

結論

隠れた内面的な悩みがあるなら、今こそ謙つて、神のきよめと癒しを求め、神の解決をいただきます。

研究資料

(小平徳行)

ここはナアマンの重い皮膚病の癒し(きよめ)の記事であるが、ただ癒しだけにとどまらず回心にまで至った(15)。当時は多くのユダヤ人が預言者の訓告を気にも留めない時代であり、多くの重い皮膚病患者がいたが、誰もきよめられることはなかったのである。その中で異邦人であるナアマンだけが、預言者による神の言葉に従い、きよめられたのである。イエスはこの事をご自身の郷里の人々の不信仰を指摘する時に語っている(ルカ4:27)。

テキスト

1 ナアマン スリヤでは一般的な名前で「慈悲深い」を意味する。主がかつて彼を用いてスリヤに勝利を得させられた。これは列王上22章のアハブ、ヨシヤパテ連合軍とスリヤとの戦いのこともかもしれない。異邦人も主に用いられる器である(イザヤ10:5、44:28)。重い皮膚病(ハツァーラアト) は旧約聖書においては種々の病気や皮膚病に用いられている。様々の腫れ、かさぶた、白斑、明るいあるいは暗い斑点、かさかさの皮膚などの特徴を伴う。またそれは羊毛、麻、革製品のかびや、壁

の真菌類の特徴も表す。

2-3 ひとりの少女 この少女はナアマンの癒しと回

心において重要な役割を果たした。彼女はスリヤの略奪隊に捕えられて連れて行かれたが、主に遣わされたといえる。名も無き捕われ人であったが大胆に証しをした。いかなる境遇においても福音の前進の機会となり得る(ピリピ1:12)。いやしたことでしょう この章ではこの病について「いやす」と「きよめる」の二つの言葉が使われている。「いやす」という言葉には「動かす、取り除く」という意味がある。つまり病から人を動かす、自由にする、または症状を取り除くということである。重い皮膚病はイスラエルでは宗教的な意味合いで扱われ、「きよさ、汚れ」の問題とされている(レビ13章)が、異邦人にとってはいやされるべき病気として扱われている。

5-6 わたしはイスラエルの王に手紙を書きましよう スリヤの王がイスラエルの王に手紙を書いたのは、預言者も王の支配下にあり、王からの指示で事が進むと思っていたからであろう。銀十タラントと、金八千シケルと、晴れ着十着 診断を求める際に贈り物をするのは慣例であったが、これは例外的な豊富さであった。

7 イスラエルの王は：衣を裂いて言った 重い皮膚病の癒しは人間的には不可能なものであったゆえに、これを無茶な要求と感じ、戦争の挑発と受け取ったのであろう。ナアマンは膨大な贈り物を携えて行ったが、それでもイスラエルの王の恐れを和らげることはできなかった。

8 どうしてあなたは衣を裂いたのですか エリシャはイスラエルの王の不信仰を指摘している。イスラエルに預言者のあることを知るようになる これはエリシャというよりも彼を通して働いておられる神の存在が知られるようになることを意味している。そして同時に、他の神々が無力であることを示す機会にもなるのである。

11-12 ナアマンは怒って去り ナアマンは自分なりに、どのような方法で癒しがなされるのかを思い描いていた。しかしエリシャの要求はナアマンにとって予期せぬ要求であり、彼が自分の前に姿さえ現さなかったことを無礼に感じたのである。ダマスコの川：はイスラエルのすべての川水にまさるではないか ナアマンが怒ったのは、ダマスコの川がヨルダン川と比較して立派な川であるという理由もあるかもしれないが、真の理由は、自

分をへりくだらせて神の方法に従うことに気が進まなかったことであつた。ヨルダン川が用いられたのは、癒しは川の水ではなく主がなさるものであることを示している。エリシャの命令はナアマンに謙遜と信仰を教えるためであつた。

13 わが父よ、預言者があなたに、何か大きな事をせよと命じても、あなたはそれをなさらなかったでしょうか しもべたちの訴えは理にかなっていた。ナアマンは自分の病気が重いいため、簡単な方法でよいはずがないと思つたのかもしれない。しかしこの病の癒しは困難であり、神の力でなければ不可能であるので、ナアマンが考えるどのような困難な事をしてもして癒すことはできなかったであろう。だからこそ神の恵み以外の方法に期待はできないのである。ナアマンの発想は自分の苦行にたよるもので、福音とは異質であつた。

14 神の人の言葉のように 癒しは神に従うところからくる。七たび 七は完全数。同じことを繰り返すのは信仰が試されることでもあつた。

参考図書 7月24日分と同じ。

聖書

列王下5・1～14

タイトル

どうしてですか？ 隠れた悩みを：

暗唱聖句

身を洗って清くなれ。 列王下5・13

目 標

隠れた内面的な悩みのために神の解決を
頂く。

導入

(和田 治)

「こんなこと、誰にも言えないよ…。」しよっちゅう「きみは良い子だね。」って言われてきた6年生の勝（まさる）君。でも、実は、むしゃくしゃした時、大人の見ていないところで弟や妹にあたっちゃうんです。「もうやめなぐちゃ！」と思いいながら、止められません。皆さんには誰にも言えない悩みがありますか？ 今日、隠れた悩みを解決していただいた人のお話です。聴きた〜い！

大勇士ナアマンの悩み

「ぐぐ…く、苦しい〜！」今日もスリヤの国の将軍がうめき声を上げています。彼の名はナアマン。主なる神様の力によって母国に勝利をもたらした大勇士です！でも、見るからに強そうな外側の姿からは想像もできない弱点が、隠れたところにあつたのです。実は、身体中

の皮膚がただれて痛くてものすごく苦しい、重い皮膚病で、ナアマンは悩み続けていました。その皮膚病は、どんな医者にも治せない重い病で、肉も腐っていくのです…。「こんな痛さなんてへっちゃらだ！」と何度言い聞かせても、我慢できないほど苦しいのです…。

皆、ナアマンがそんな隠れた悩みを持っていることを知りませんでした。でも、彼の妻に仕えているユダヤ人の少女だけはわかっていました。彼の病気の重さも、そして、それを誰が癒せるのかも！「ご主人様は、サマリヤにいる預言者のところへ行かれたらよろしいのに。きっと、その方が重い皮膚病を治してくださいすわ。」

預言者エリシャのことばの通りに！

少女の一言がきっかけで、間もなく、イスラエルの預言者エリシャのことを知ったナアマン。たくさん贈り物をもって、王様にお手紙も書いていただいて、ついにエリシャのお家の前までたどり着きました。ところが、お家から出てきたのはエリシャではなく、その使いでした。「ヨルダン川へ行つて七回身体を洗いなさい。そうすれば、あなたのからだはもとのように治って清くなるでしょう。」「な、な、なんだとお〜!? 預言者がじきじ

8月

7日 礼拝メッセージ例

きに出て来てあいさつし、手をあて、彼の神の名を呼んで、治してくれると思っていたのに！ ヨルダン川で洗えたと？ それなら、国に流れておる川のほうが、よっぽどきれいじゃないか。ばかばかしい！」

かんかんに怒ったナアマンは、来た道を引き返すではありませんか。と、その時、ナアマンのしもべたちが追いついてこう言いました。「ご主人様、あの預言者に、何か難しいことを言われても、そうなさったのでしょうか。それなら、『身を洗って、きよくなれ』と言われただけのことですから、そのとおりになさったらいかがですか？」

「むむ、それもそうだな。よし！」氣を取り直したナアマンは、ヨルダン川へ下って行き、言われたとおり、七回、水につかりました。すると、どうでしょう。皮膚は幼子のようにつやつやし、すっかり治ったのです！

「すごい！ まことの神様が癒してくださったのだ！」

隠れた悩み

大勇士ナアマンでさえ、隠れた悩みがありました。でも、エリシャを通して神様が癒してくださいましたね。同じように、隠れた悩みがあってもどうか安心してください！ 神様はあなたの悩みを良く知っていて下さって、

解決してあげたいって願ってくださっています。「実は学校でいじめられていてとっても辛いんだ…」とか、「自分でもいかな癖があつて、でも、どうしても止めれない…」とか。ひとりで悩んでいないで、先生や友達と一緒に神様にお祈りしてみよう！ 神様が届いてくださいます！

結び

そして、どうか忘れないでください。隠れた「罪」も、絶対にそのままにしておいてはだめだってこと！ もし、「イエス様を信じるだけで清くされるなんてばかばかしい」なんて言ったら、せっかくの神様の赦しゆるが自分のものにならないままです。でもナアマンが、言われた通りにしたように、神様が定めてくださった方法の通りすれば良いのです。「イエス様の十字架は僕の、私のためでした。イエス様、〇〇の罪を、ごめんなさい、お赦しください。清くしてくださいと信じます！」って素直にお祈りすれば、必ず赦され、清くされるのです。今日、ぜひそのようにお祈りしよう！ あの勝君も、神様にお祈りして、罪赦され、もう二度といじわるしないやさしいお兄ちゃんに変えられましたよ。ハレルヤ！

♪フリー♪ (イン40、PW56)

聖書 列王下6・15〜23 テーマ 取り囲む神の守り

序論

(石田高保)

私たちは目に見える世界と見えない世界の両方を生きている。見える世界は実は不確かで、見えない神の世界こそ確かで不動のものであることを学びたい。

一、見えない世界を知る

イスラエルはスリヤの国と戦争を続けていたが、いつでも敵の裏をかくことができた。それは預言者エリシャが敵の行動を何もかも見抜いて、イスラエルの王に伝えていたからである。スリヤの王の軍事行動は、イスラエルに筒抜けであった。そんなある日、エリシャがある町にいて、知ると、スリヤの大軍は蟻のはい出る隙間もないほどびっしりと囲み、につくきエリシャを捕まえようと手ぐすねを引いて待ち構えていた。しかし大軍に取り囲まれていたのはエリシャたちではなく、取り囲んでいるはずのスリヤ軍であった。彼らは天の軍勢に十重二十重と取り囲まれているとは、ゆめゆめ思わない。

この有様は、人生の勝利者であると誇っているが、実は

敗北の坂を下りつつあることに気づかない人のようである。イエス様のたとえ話に出てくる愚かな金持ちがそれにあたる。豊作のため取り入れた麦をしまう場所に困って新しい倉を立て、それでもあふれかえる収穫を前にしてこれから何年も遊んで暮らせると左うちわでいたその夜、神さまの声があつて、「愚か者め、今晚お前の命は取り去られる。そうしたらお前の財産は誰のものになるのか、人手に渡ってしまうのではないか」と言われてしまう。神さまに頼らなくてもやつて行けるという思い上がり、この金持ちを破滅させた。「悪しき者はそうでない、風の吹き去るのみがらのようだ」(詩篇1・4)、神さまとの関係を計算に入れない生き方は的外れである。

天の軍勢が見えなかったのは、スリヤ軍だけではなかった。エリシャの召使いも気づかない。預言者のそばにいても、自分は絶体絶命の窮地にあるとおびえ切っていて、目の前の敵の大軍しか目に入らない。この若者のように私たちもピンチに陥って気が動転することがあるが、信じる者は慌てることがない。

あるクリスチャンが仕事で体を壊し、とうとう入院することになった。来し方行く末を思い巡らしていた時、ふと

目を挙げると、夢かうつつか、病室のドアの内側に白い服を着た立派な男性が二人いて、ドアの前で互いに向き合って立っているのが目に入った。そのドアは開いていて真っ直ぐに廊下が延びていたが、その廊下の両側にも同じような人たちが向き合っていて、それが何十人もいた。主よ、これはどういうことですかと尋ねると、これらの者たちはあなたを守る私の使いであると。まさに天の軍勢がピンチの中にある私たちにも遣わされて、十重二十重と守っている。ピンチでないときもクリスチャンには確かな守りの御手がある。

二、見えない世界を見る

からだの目で見える世界と、心の目で見える世界とはずいぶん違うものである。たとえば人の第一印象は、あとになるとどんどん変わっていくことがある。それと同じく心の目で見える世界と神の目で見える世界もずいぶん違うものである。たとえば誰かのことを人間的な基準で評価しても、神さまの基準はずいぶんと違う。

では見えない神の世界を見るためにはどうすればよいのか。「みことばの戸が開くと、光が差し込み、わきまえのない者に悟りを与えます」（詩篇119・130、新改訳）。聖書の言

葉は神の国を見るための窓のようなものである。この世の世界から神の世界を橋渡しする。この世の価値観から、聖書的な価値観に切り替えるためにはどうしても言葉の橋渡しが必要。神の私へのみこころは基本的に聖書をおして語られる。神の思いを知りたいければ、聖書を読んで心に響くみ言葉を捜すことである。ピンと来る日があっても無くても、読み続ける中で、主は必ず語って下さる。み言葉が突破口となって神の国のことがわかってくる。どんな人でも最初は聖書を読んでもチンプンカンプンだが、根気よく読み続けていると、ある時から心の目が開かれて、聖書がわかるようになり、面白くなる。そうなるまでは自力でできる人はいいが、できれば先輩クリスチャンに根気よく関わってもらうと良い。他のクリスチャンがみ言葉をどのように解釈しているのか、生活に当てはめているのかを聞くと、聖書がぐつと身近なものになる。礼拝後にメッセージで気づいたことを語り合う、祈祷会で証しをする、グループでみ言葉を分かち合う、聖書日課での気づき語り合う。こうして自分や周りの人の徳を高め合いたい。

結論

聖書をとおして、見えない神の世界を見る目を養おう。

研究資料

(金井由嗣)

背景① 当時の国際情勢

イスラエルが南北に分裂していた時代の北王国イスラエルが舞台である。スリヤ(原文ではアラム)はイスラエルから見て北東の地域で、ダマスコはその中心的な都市国家。ダマスコはダビデ・ソロモンの時代にはイスラエルの支配下にあったがソロモンの治世の終わりに独立し、イスラエルと敵対するようになった(列王上11・23～25)。

この時代はアッシリアとエジプトの二大帝国がそれぞれ勢力を拡大しつつあり、その中間にあるスリヤ・フェニキア・イスラエル・ユダなどの諸国は生き残りをかけて複雑な外交・軍事政策をとった。スリヤとイスラエルはしばしば戦っているが、対アッシリア(カルカルの戦い、前853年)や対ユダ(列王上15・19)では同盟を組むこともあった。後にはイスラエルとユダが連合してスリヤと戦った(列王下8・28)。アッシリア、ついでバビロニアがこの地域全体を征服するまでこのような諸勢力の離合集散が繰り返されたのである。

背景② オムリ王朝

北王国イスラエルでは約210年間に9回の政変があった。その中でオムリ(列王上16・23)に始まる王朝は四代40年以上にわたって続いており、政治的には成功した方である。この王朝はフェニキア、ついでユダと政略結婚によって結びつき、経済的繁栄を実現してスリヤに対抗した。またモアブをも支配下に置いた(メシヤ碑文)。サマリヤに首都を築いて国内支配を安定させたのもオムリである。しかしその繁栄と引き換えにされたのはイスラエル民族の信仰と伝統であった。アハブのためにフェニキアから迎えた王妃イゼベルが導入したバアル信仰(列王上16・30～33)と専制政治(列王上21・1～26)は神の民としてのイスラエルの基盤を破壊するものであり、聖書はアハブ王を「イスラエルのすべての王にまさって…主を怒らせ」(列王上16・33)たと評している。経済力と軍事力を再優先した政治は一時的な繁栄をもたらすが、民の精神の荒廃は後から国の滅亡を来たらせる。エリヤをはじめとする主の預言者たちが戦った相手は、このような実利主義の繁栄信仰だったのである。

テキスト

15 軍勢が：町を囲んでいた 8～14節参照。エリシャがイスラエル王のために預言してスリヤ軍の在り処を知らせたため、スリヤ王が彼を捕えるために軍隊を遣わしたのである。

16 恐れることはない 直接的な命令文であり、「恐れるな」（新改訳）「恐れてはならない」（新共同訳）が適切。われわれと共にいる者は彼らと共にいる者よりも多いのだから 目に見えない神の力を信じる者の確信を示す。

17 どうぞ、彼の目を開いて見させてください 原文の直訳は「彼の目を開いてください、そうすれば彼は見るでしょう」。火の馬と火の戦車 エリヤがエリシャと別れて天に登った場面（2・11）を思い出させる光景。

18 この人々の目をくらましてください 直訳は新改訳の「この民を打って、盲目にしてください」。信仰によって目が開かれた若者と対照的である。この世で力を振るって弱者を踏みつけにする者には主のわざは見えない。

19 これはその道ではない エリシャは力で相手を打ち破ることを求めず、彼らに主のわざの偉大さを見せた上で送り返す方法を選んだ。スリヤ兵の目が開かれた時には、す

でに半ば捕えられた状態であった。

21 彼らを撃ち殺しましょうか 自分の手柄でもないのに敵を殺そうと逸る王の姿は見苦しいが、それほどスリヤの攻勢に苦しめられていたという事情も見て取れる。

22 撃ち殺してはならない エリシャはあくまでも平和的な解決を求めた。力で力に應じるこの世の手段では戦争を止めることはできない。主のわざは愛とゆるしを通してこの世に啓示される。

23 スリヤの略奪隊は再びイスラエルの地にこなかった 主のわざの偉大さに圧倒された敵は、もはやエリシャを付け狙うために軍を派遣して来なかった。略奪隊〔へ〕ゲドゥードは小規模の侵入部隊を意味するので、国家規模の戦争がその後も続いた記録（24節以下）とは矛盾しない。とはいえ、スリヤの王が真にこの事件の教訓を受け止めて平和の道を選んでは、後の敗退や家臣の謀反による死、さらには国の滅亡をも食い止めることができたかもしれない。

参考図書 ワイズマン（ティンデル）、舟喜信（新聖書講解シリーズ）、ネルソン（現代聖書注解、Keil & Delitzsch、フアイファール『旧約の歴史』、オルブライト『旧約聖書の歴史』、池田裕『旧約聖書の世界』。

聖書

列王下6・15〜23

タイトル

あなたを助ける神の守りを見よう！

暗唱聖句

主よ、どうぞ、彼の目を開いて見させてください。
列王下6・17

目標

神の助けと守りに目を開かれ、信頼をもって生きる。

導入

(松浦みち子)

教会学校に通う星子ちゃんという女の子がある時、交通事故に遭いました。信号のない横断歩道を自転車で渡っていたときのことです。80キロ以上の猛スピードの赤いスポーツ車が横断歩道を横断中の自転車をはね飛ばしたのです。車のボンネットにはうり上げられそこから転げ落ちて車は止まりました。その衝撃で7か所以上を骨折し救急車で運ばれましたが、掛けていためがねが吹っ飛んで、いくら探しても見つかりません。事故でメガネが割れ眼球に刺さってしまう可能性もあったのですが、神様が守って下さったのです。昔も今も神様は信じる者を守って下さるのです。

イスラエル軍の戦い

イスラエル軍がスリヤの王と戦っていたとき、預言者エリシャは神様からの特別な導きによって、スリヤ王の作戦をキャッチしてイスラエルの王に告げることができました。そのため、いつもスリヤ王は裏をかれて作戦負けしてしまふのです。そこでスリヤ王はたくさんの軍隊を送ってエリシャを殺してしまおうと、エリシャのいる町ドタンを包囲したのです。

敵に包囲されたエリシャ

「た、た、大変です。先生！」朝早くエリシャの召使が、息をハア、ハア弾ませながら駆けつけてきました。「敵がこの町の周りを取り囲んでいます。もうどこにも逃げるところがありません。ああ、どうしようか」。それを聞いたエリシャは落ち着いた声で言いました。「恐れることはない。われわれと共にいる者は彼らと共にいる者よりも多いのだから」。そして「主よ、どうぞ彼の目を開いて見させてください」と祈ると、召使の若者の目が開けて、今まで見えなかったものが見えるようになりました。「ああ、先生！ 見えます。私たちを守ってくれるものが見えます」と感嘆の声をあげました。エリシャのまわりには、火

の馬と火の戦車が山に満ちて、敵よりもずっと多く、力強く守ってくれるのが見えました。スリヤ王とその軍隊にはもちろん見えません。彼らは包囲したエリシャを捕えようと攻めてきました。その時、エリシャは主に祈って言いました。「どうぞ、この人々の目をくらましてください。するとエリシャの言葉の通りに彼らの目はくらまされました。目が見えなくなった兵隊たちはだれひとり戦うことはできませんでした。町のまわりは大混乱となりました。

平和をつくりだす人

するとエリシャは、「こっちの道ではない。あっちの町ではない。わたしについてきなさい」と言いながら、スリヤの軍隊をイスラエルの首都サマリヤまで連れて行きました。サマリヤに着いた時、エリシャは再び「主よ、この人々の目を開いて見させてください」と祈りました。すると彼らの目が開け、全軍が捕虜となつてしまったことに気づきました。ドタンからいったいどのようにこの地まで来たのかさっぱりわかりません。彼らの驚きは想像もつきませんね。こうしてイスラエル軍は戦わずして彼らを捕虜としたのです。イスラエル王はこの時とばかり、敵を撃ち殺そうと考え、「エリシャ先生！ 彼らを撃ち殺しましょうか。

撃ち殺しましょうか」。と二度も尋ねています。しかしエリシャは「撃ち殺してはいけません」と言い、「彼らにパンや水を与えてもてなさない。そして、主君のもとに帰さない」と言いました。そこでイスラエル王はエリシャの言葉に従って、彼らをお客さんとして盛大にもてなし、スリヤの国に送り返してあげました。殺されると思ったのに、助けられ、ごちそうにまでなった敵国の人々は、それから二度とイスラエルの国に攻めてきませんでした。神に信頼をよせ、神と共に生きるエリシャのはからいに、両国軍とも一滴の血も流すことなく平和がもたらされたのですね。エリシャ先生はイエス様が言われたように「平和をつくり出す人たちは、さいわいである、彼らは神の子と呼ばれるであろう」（マタイ5・9）と、平和をつくり出す人だつたと言えます。

困難が起こった時も、神様の守りを確信できる人はびくともしません。エリシャにはピンチの時、神の使いの守りが見えていたのです。神様はいつも私たちと共にいて、私たちを危険から守り、助けてくださるお方だと信じて「目を開いて下さい」と祈りながら歩みましょう。

♪開いてください、心の目を♪（リビングプレイズ51）

聖書 ヨナ1・1-17 テーマ 神の前を離れて

序論

(石田高保)

ヨナの預言者としての行動には不従順があり、筋が通っていたとはお世辞にも言えません。しかしそれでも神はあきらめずに彼を用いなさいました。そのように私たちにも関わっておられると見るができます。

一、神から離れようとする人

〈立つて、あの大きな町ニネベに行き、これに向かって呼ばわれ〉、つまり悔い改めを宣べ伝えよと主からお声がかかった時、ヨナはどういてい受け入れることができませんでした。というのもヨナの国イスラエルは、その北方に位置するアッスリヤに圧迫されており、ニネベはその首都だったからです。ヨナがその町に神の言葉を伝えて人々が悔い改めでもしたら、敵を救うことになってしまうことを恐れたので、正反対のタルシシへ船で渡ってしまおう、そうすればこの従いたくない使命から逃れられると考えたわけです。

渡りに舟とばかりに、〈ちようど、タルシシへ行く船が

あったので：乗った〉。自分の願ったように事の運ぶことが、必ずしも主のみこころとは限らないことがあります。むしろその反対を行く誘惑であるかもしれません。ヨナの場合には三度も〈主の前を離れて〉と書かれてしますから、それがはつきりしています(3、10)。しかし主は私たちが大きな過ちをしないように、み言葉や助言者を備えておられます。

人間は神に与えられた自由意志によって、神の言葉に従うことも、従わないこともできます。神は人間を強引に従わせることはなさいません。しかし神は摂理の中でみ言葉に従い、祝福にあずかるようにと道備えをなされます。〈主は大風を海の上に起された〉のもその一つの現れです。

二、追い求める神

〈わたしは海と陸とをお造りになった天の神、主を恐れる者です〉という告白に船乗りたちが震え上がったのは、ヨナが海を支配する神に背いたことを知ったからです。そして〈あなたはなんたる事をしてくれたのか〉と、異邦人たちから過ちを責め立てられては、ヨナも恥じ入り、ついに本当のことを言いました。〈この激しい暴風があなたがたに臨んだのは、わたしのせいです〉、ヨナは、この絶体絶

命の状況を招いたのは、自分の神の命令にそむいて逃げたせいであることを自覚しています。当時の船乗りたちは、人を海に投げ入れて神々への犠牲とすれば、その怒りがなだめられて暴風が収まると信じていました。それを知っていたヨナは自分を犠牲にしてくれと申し出るのです。船乗りたちはできるだけその手は使いたくなかったので、船をこいで陸に戻ろうとしましたがききました。しかし万策尽きたとき彼らはやむを得ずヨナを海に投げ入れました。するとたちまち大嵐が嘘のように静まりました。これには船乗りたちも恐れおののき、ヨナの神がまことに天地を造られた神だと認めざるを得ませんでした。皮肉にもヨナの不従順な行動を逆手にとって神が栄光を表されることとなりました。

いっぽう海に投げ込まれたヨナと言えば、思いがけない方法で命拾いします。主は大いなる魚を備えて、ヨナをのませられた。しかも三日三夜その魚の腹の中で生かさされ、おそらく元の海岸まで運ばれて生還します。神は大嵐を起こしてヨナを危険にさらすだけではなく、大いなる魚を用意して彼の命を救われました。一見ありえないことのようにですが、イエス様はご自分が死人の中から三日目によみがえると預言するにあたって、ヨナの出来事を引き合い

に出しておられることから、まぎれもなく神の奇跡であることがわかります(マタイ12・40)。ここにはどんな方法を使ってもヨナを預言者として用いて二ネベの人々を救おうとする神の熱心が表れています。同じように自分を愛するように身近な人を愛し、福音を伝えろという使命のために用いられない人はいません。神は私たちを何度でも用いて下さるのです。

結論

神の前を離れる、それはあつさり、あるいはぎりぎりのところで神の言葉よりも自分の思いを選び取ってしまう傾向と言えるでしょう。また神の使命に従いきれない心の状態を指しているのかもしれませんが。私たちは聞く耳を持ちさえすれば神の声を聞くことができます。聖書を読んでいる人、メッセージを聞いている人は、すでに神の声を聞いていると言えるでしょう。あとは従う仕事だけが残っています。それは誰も代わることができません。しかし神の声を聞いて従うという営みには、必ず祝福があります。その人はいつも喜んでいられるだけでなく、身近な人に良い影響を与えるようになります。

研究資料

(小平徳行)

本書には異邦の民をあわれむ神の愛と共に、一人の預言者ヨナを忍耐強く取り扱われる神の愛が描かれている。

テキスト

1 アミツタイの子ヨナ ヘブル語で「鳩」という意味。列王下14・25によれば、ヨナはヤラバアム2世の領土拡大について預言した北イスラエルの預言者として登場している。父親の名が同じであることから、本書のヨナと同一人物であると考えられている。

2 ニネベ ティグリス川東岸にニムロデによって築かれ(創世記10・11)メソポタミヤにある最古の町の一つ。アッスリヤ王国の主要都市でセナケリブ王によって首都と定められた。後にメデイヤとバビロン連合軍によって滅ぼされる(BC612年)。向かって(ヘ)アルこの前置詞は何かに「逆らって」という意味があり、異教の地ニネベに対する宣教の厳しさが表されている。預言者ヨナの使命は異教の民ニネベの罪に対して立ち向かい、彼らに罪の悔い改めを訴えることであつた。

3 ヨナが使命を放棄した動機はニネベの宣教が困難であつたというよりは、4・2のヨナの告白から分かるように、彼の宣教によってニネベが悔い改め、神が災いを思ひかえされるのではないかという恐れからであつた。ヨナとしてはニネベはイスラエルにとって脅威となるため、滅びることが望ましかつたのである。彼は臆病だつたのではなく、偏狭ではあつたが愛国心から神に従わなかつた。しかし、理由はどうであれ、主の命令に従わなかつたことは良い事ではない。タルシシ どこを指しているのかは諸説あるが、通常は現在のサルジニアか、あるいはスペイン南部のタルテスと同定される。ここはヨナの時代のヘブル人たちに知られていた最も遠く離れた遠隔地であり、「世界の西の果て」という響きを持つ表現としても用いられている(詩篇72・10、イザヤ66・19)。ヨナがタルシシ行きの船に乗り込んだのは、神の召命を逃れて、できるだけ遠方に行こうとしたためである。ヨツパ(ヘ)ヤツフォ) 地中海沿岸にある港町で、エルサレムの北西56kmにある。現在はテル・アビブと合併。

4・5 神への不服従は当人だけでなく、周囲の人々に

も損失をもたらすことがある。**めいめい自分の神を呼び求め** 水夫の国籍が様々であったのか、またはフェニキヤなどの多神教国の民で、各自の守護神がいたのかもしれない。**積み荷** (ハ) ケーリーム) ただの荷物だけでなく、船具をも指す。事態がいかにも切迫していたかを思わせる。**船の奥に下り** 現実から少しでも遠くへ逃れようとする試みであり、神からの逃避であった。ヨナは嵐の原因が自分を知っているながら、あくまでも神から離れようとする愚かな試みであった。

7 くじを引いて 直訳は「くじを落とす」。くじ (ハ) ゴーラール) はアラビヤ語の石と関連のある語であることから、いくつかの小石が用いられて、ある特定の一つが落ちることによって決められたのであろう。くじで神のみこころを知ろうとするのはユダヤ人を含め広く古代の人々の間で用いられていた。旧約聖書でも多くの例があり、正当な方法とされていたことが分かる。

9 ヘブルびと イスラエルの民が他の異教の民との区別を意識した呼称。**海と陸とお造りになった天の神** 今、海が荒れているのは、この神の怒りのゆえであることにヨナは気づいていた。

10 はなはだしく恐れて 水夫たちがひどく恐れたのは、イスラエルの神が自分たちの神々とは比較にならないほど恐ろしい神であるという認識によるものであった。**12 わたしを取って海に投げ入れなさい** ヨナには荒天の原因になっている自分がこの船にいれば船は助かるに違いないという確信があった。

13 ヨナに同情した船員は何とか彼が犠牲になることを避けようとして、舟を陸に戻そうとしたが不可能であった。罪の赦しは犠牲なしにはあり得ない。

16 この異教の民の反応は、彼らのうちにイスラエルの神に対する畏敬の念が起こされたことを示している。

17 歴史的事実でないとする解釈や、類似の事件が実際に起こったことを指摘して、信ぴょう性を裏付けようとする論議も展開されてきたが、類例が見いだされなくても、全能の主がなされた超自然的御業と考えるべきであろう。

参考図書 鈴木昌「ヨナ書」『新聖書注解・旧約4』(いのちのことば社)、勝原忠明「ヨナ書」『実用聖書註解』(いのちのことば社)、W・R・トンプソン「ヨナ書」『ウェスレアン聖書注解・旧約篇4』(イムマヌエル綜合伝道団) 他

聖書

ヨナ1:1~17

タイトル
暗唱聖句神さまから逃げるヨナ
わたしは海と陸とをお造りになった天の
神、主を恐れる者です。 ヨナ1:9

目 標

神に背いて歩むことの災いを覚え、神に
従う者となる。

導入

(松浦みち子)

質問です。神様は私たち人間に対し何を望んでおられるでしょう。(自由に答えさせる)。ズバリ、答えましょう！「すべての人が救われることです。その中には人を殺した殺人犯なども含まれるのですよ。」「えっ！」驚かないでください。イエス様は十字架に架かり、すべての人のために救いの道を開いてくださったのです。

でも、私たちの心にはそのような広くて深い愛がないことに気づかれます。ちょっと胸に手を当てて考えましょう。あなたの心に、あの人嫌だなあと思う人が浮かんできませんか。まして自分をいじめたり、乱暴する子など好きになれません。むしろ、あんな奴いなければと思います。今日は、そんな心を持った人のお話しです。

神様の命令を拒むヨナ

その人の名はヨナと言います。この名には「鳩」という意味がありますが、全然鳩のように素直ではありません。頑固なイスラエルの預言者でした。ある日、神様はヨナに「立って、あの大きな町ニネベに行き、わたしのことを伝えなさい。あの町の人々は悪いことばかりしている。このままでは滅びてしまう。神様を信じ、悪い事をやめるように伝えなさい」と、言われました。「えっニネベなんてんでもない！」ヨナは神様の命令を拒みました。さて、ニネベの町というのは、アッシリヤの首都でも大きな町でした。当時のアッシリヤの国は強固で乱暴で残忍な国だったので周りの国々から怖がられていました。しかも、やがてイスラエルを滅ぼし、全てのものを奪い去ってしまうと預言されていたのです。ヨナはそんなニネベの町に行きたくありませんでした。「悪い事ばかりするアッシリヤの人々は滅んでしまえばいいんだ」と思っていたのです。そこで、ヨナは神様の命令に従わず逃げようと考えました。ヨッパの港に着くと、そこに丁度タルシシ行の船がありました。「おっ、これはよい具合だ」と、船賃を払い船に乗り込みました。タルシシはニネベとは全く逆方向の港だった

のです。「あーあ、これでひと安心。疲れたわ」と船底に下りていって「グーグー」といびきをかいて眠ってしまいました。

思いがけない大あらし

ところが、しばらくすると海に大風が吹いて大荒れになりました。さっきの青空は一変して、ピューピューと激しい風が吹きつけ、船は木の葉のように揺れ、今にも沈みそうです。ザッブーン。大波が甲板を洗います。「わあー、船があぶないぞ！ このままでは沈んでしまう」。「さあ、ぐずぐずしないで荷物を捨てろ！」みんな真っ青になって、口々に「おお、神さまー、助けて下さい」と叫び声を上げています。ところがヨナは船底であいも変わらずグーグー寝ているではありませんか。人々は「こんなに海が荒れるのは、誰かのせいにかがいない！」「そうだ、くじ引きしてみよう」と、全員でくじ引きしました。眠っているヨナのところにいくじが回ってきました。「さあ、起きてください。くじ引きですよ」。「うーん、むにやむにや。どーれ」「ややや！。当たったぞ。いったいあなたは誰か。何をしたのか」。「ごめんなさい。わたしはヘブル人です。わたしは海と陸をお造りになった天の神、主を恐れる者です」。ヨナは自

分が神様の命令に背いて逃げてきたことを話し、「どうぞ、わたしを海に投げ込んで下さい。そうすれば風は止むでしょう」。かわいそうですが、しかたありません。人々は「それ、1、2、の3」、ボーン、ザッブーン、ブクブクブク。ヨナは見る間に海に沈んでいきました。なんと、大荒れの海はたちまち静かになり、人々は神様の大きな力に驚きました。

神様の備え

さて、ヨナはどうなったのでしょうか。溺れて死んだのでしょうか。いいえ、神様は大きな魚を備えて、ヨナを飲み込ませたのです。「バクツ」「あれー、ここはどこだろう。何だかぬるぬるするなあ。これって、わかめ？ あつ、ここは魚の腹の中だ！」ヨナは「神様、助けて下さってありがとうございます。ご命令に背いてごめんなさい。これからは、神様のおことば通りにいたします」と心から謝りました。神様はなんと隣み深いお方でしょう。背いたヨナを見捨てずに、魚を備えて助けて下さいました。私たちは、ヨナのようにではなく神さまを恐れ、素直に「はいっ」と従う者になりましょう。

♪ヨナ、ニネベに♪（イン旧135、救いの聖歌36）

聖書 ヨナ3・1～4・11 テーマ 神の憐みによる宣教

序論

(石田高保)

ヨナは神への不従順のため、海に投げ入れられたにもかかわらず、備えられた大魚に助けられ、その腹の中で三日間、悔い改めと再献身の時を持ちました(2章)。そういうヨナに神は再び使命を授けます(3・1～2)。神は何度でもやり直させて下さると励まされます。

一、憐み抜き宣教

〈そこでヨナは主の言葉に従い、ずいぶんと遠回りしたものの、ヨナはようやく主に従ってニネベへと向かいます。ニネベは大都会でしたが、意外なことにさばきの預言を触れ回って一日目で人々が罪を悔い改め始めます。それは一般民衆だけでなく、王や大臣という支配者にまで及び、ついに彼らの命令で国中が断食と祈りで悔い改めを表すこととなりました。高慢で暴虐な人々と思われていた彼らが、これほどあっさりと神に立ち返ったのは神の御業である、と、ヨナは認めざるを得なかったでしょう。神はニネベの悔い改めを見て、すぐに災いを取りやめます。〉

ニネベの人々の悔い改めは、イエス様から高く評価されています。「ニネベの人々が、今の時代の人々と共にさばきの場に立って、彼らを罪に定めるであろう。なぜなら、ニネベの人々はヨナの宣教によって悔い改めたからである」(ルカ11・32)。

ところが喜ぶ者と共に喜べなかったのはヨナです。〈これを非常に不快として、激しく怒り〉、主の言葉を宣べ伝えたら、ニネベは救われることが予想できたから従いたくなかったのです、私が怒っているのはあなたのせいですと言わんばかりです。納得できない思い、理不尽さへの怒りを神にぶつけています。それに対して神はあなたの怒りは正当ではないとたしなめなさいました。もし憐み抜きで、義務感や罪悪感から福音を伝えるとすれば、動機としては健全ではないでしょう。主は「わたしが好むのは、あわれみであって、いけにえではない」と言われます(マタイ9・13)。

二、宣教は憐みの心から

こうなったら自分の願いどおりニネベがさばかれるのを見届けてやろうと、ヨナは見晴らしの良い所に小屋を作って長期戦の構えを見せます。人々が再び神に背くようにな

るのを期待したのでしょうか。もしそうなら預言者にあるまじき行動です。信仰者も人間的な願いに支配されると、思いがけない行動に出ることがあります。そういう時こそ、信仰の仲間の出番です。慰めたり、いたわったりするばかりではなく、愛をもって戒めてあげて下さい。イエス様は言われます「もしあなたの兄弟が罪を犯すなら、彼をいさめなさい。そして悔い改めたら、ゆるしてやりなさい」(ルカ17・3)。それでこそ神の家族ではないでしょうか。

暑さから守るためにせっかく神の備えたとうごまも、枯れてしまうとヨナは神への怒りを再び燃やします。それをたしなめられると「わたしは怒りのあまり狂い死にそうです」と頑張つて怒りを収めようとしません。このように神に対して正直であるのは良いことです。神はその気持ちを受け止めつつも、ついにご自分の心の内を明らかにされます。「わたしは十二万あまりの、右左をわきまえない人々と、…この大きな町ニネベを、惜しまないでいられようか」、親の心子知らずというのでしょうか、ヨナはここに至つて神の広大無辺な憐みを悟ります。彼も独りよがりな正義感を恥じたでしょう。神は自分を偽る善人ではなく、自分に正直な罪人を求めなさいます。

結論

「好きな人を愛するためには、神の恵みは要らない。しかし嫌いな人を愛するためには、神の恵みが必要とする。私たちは敵を愛する程度しか、神を愛していないのである」という言葉があります(フィリップ・ヤンシー)。ヨナはまさにこのことを試されたわけですし、私たちも同様で、人を愛する(大切にする)とは、愛することを選び取ることであり、愛せるから愛するものではありません。愛せないというのは実は逃げ口上で、本当は愛そうとしないだけです。愛さないことを選択しているわけです。しかし私たちは神の恵みにより、聖霊によって愛することを選択することができます。そのときすでに広い意味で福音宣教は始まっていると言えるでしょう。人の話を受け止め、虚心に聴くことは、その人を愛する行動です。人との語らいの中で導きがあれば福音を語ることもよいでしょう。しかしそのタイミングには聖霊の知恵が必要です。「黙るに時があり、語るに時があり」(伝道3・7)ですから、主に聴きなながら人と語り合い、主の憐みをもって宣教してゆきましょう。

研究資料

(小平徳行)

神に逆らったヨナは死を覚悟したが、神の備えた大魚によって助けられた。神に賛美と祈りをささげたヨナは陸地に吐き出され、神は再びヨナに任務を遂行させるために、ニネベに遣わされた。今回は主に従うのだが、彼は更に取り扱われることが必要であった。

テキスト

3・4 ヨナの宣教方法は極めて単純なものであった。彼はただ悔い改めのメッセージを一日中歩き回って叫び続けた。**滅びる**（ヘ）（ハーファク） 転覆させる、激しい破壊をもたらすことを言う。この語はソドムとゴモラの滅亡にも用いられている（創世記19・29）。

5 ニネベの人々の回心は鮮やかなものであった。彼らは断食をし、灰をかぶって荒布をまとい、真摯な態度で罪を悔い改め、神を受け入れたのである。**大きい者から小さい者まで** 年齢、階層、教育などにかかわらず全ての人々を指している。

6 その回心は王室にまで至り、王も一般市民同様に悔い改めた。**朝服を脱ぎ** 王としてではなく、神の前にあ

る一人の人間として。

7 悔い改めが王室に及んだ結果、悔い改めの布告がなされた。それは人々のみならず、獣や家畜に至るまで悔い改めを命じる徹底ぶりであった。これに対する神のあわれみも家畜にまで及んでいる（4・11）。

8 **おのおのその悪い道およびその手にある強暴を離れよ** 悲しみを表す格好をして祈るだけでなく、ひとりひとりが悪しき行いを離れるように命じている。

10 ヨナの宣教には罪の赦しゆるの可能性については語られていなかったが、ニネベの人々の悔い改めの祈りと行為は、神の目にとまり、神の正しい愛の性質に基づいたあわれみを引き出した。

4・1 **ヨナはこれを非常に不快として** ヨナはその不機嫌、不快を隠そうともせず、神に対して怒った。それは彼が偏狭な愛国心をもっており、神が選民であるユダヤ人以外の民をあわれんだことに対して怒ったと考えられる。ヨナは神の命令には従ったが、神のあわれみの心をもって宣教したのではなかった。

2 **なぜなら、わたしは…知っていたからです** ヨナは神のあわれみ深さを、父祖たちの教えや、律法などによつ

てよく知っており（出エジプト34・6、7）、それは選民のユダヤ人に限られない普遍的なものであることを最初から十分認識していた。

3 生きるよりも死ぬ方がましだからです ヨナの悔しさがいかに激しいものであったかを示している。だからこそ、最初にニネベ宣教を命じられた時も、神のさばきを覚悟で背いたのであろう。

4 あなたの怒るのは、よいことであろうか ここから神はヨナにご自身の心を教えるために、彼を取り扱われる。よいこと（ヘヤータブ）は「よく行う、十分に行う、正当なことをする」という意味がある。神はヨナが怒るのは正当なことであるのかを問うている。

5 町のなりゆきを見きわめようと ヨナは神が彼の訴えに答えて、ニネベに何事かをなしてくださるのではと考えたか、あるいはニネベの人々の悔い改めの純粋性を疑っていたのかもしれない。

6 とうごま パレスチナ地方ではごくありふれた植物で、やわらかいつる状の茎とぶどうの葉のような大きな葉を有し、2〜3日の短期間のうちに大きく成長して十分な日陰を作ることができる。しかし茎が少し損傷した

だけで枯れてしまうひ弱な性質を持っている。備え（る）（ヘマナー）「任命する、定める」の意。1・17と本章とで4回使われている。神は様々なものを備えて備えてヨナを取り扱われた。

10〜11 惜しんでいる（ヘフース）「あわれみをもつて見る」の意。神はヨナがとうごまを惜しむ思いを草木より尊い人間に向けるべきことを教えている。神はニネベの住民を惜しむがゆえに、悔い改めた民を救された。ヨナは主の心が分かっていたいなかった。しかし主はそれを承知の上で、ヨナに再びチャンスを与えたのである。それはヨナに主の心を教えるためであった。右左をわきまえない人々 神の律法を知らず、善悪の判断のつかない人々、霊的な真理を理解していない人々のこと。

神は異邦の民にも選民と同じように、分け隔てなく救いを与え、育み、変わらぬ愛と恵みを注いでくださる。すべての人間の創造主である神は私たち一人一人に関心を持ち、私たちを罪から解放し、真の祝福の道へと導いてくださる。しかしニネベは、いつしか神から離れ去り、ついには滅亡を味わうことになる（ナホム書参照）。

参考図書 8月21日分と同じ。

聖書

ヨナ3・1～4・11

タイトル

神のことばを伝えたヨナ

暗唱聖句

ましてわたしは十二万あまりの、右左を
わきまえない人々を、惜しまないでい
られようか。
ヨナ4・11

目標

神の憐れみを覚え、福音を伝える者とな
る。

導入

(松浦みち子)

先週は神様の命令に背いて、逃げ出したヨナのお話し
を聞きましたね。ヨナは海に投げ込まれました。ところ
が、大きな魚が大きな口を開け、パクツとヨナを飲み込
みました。いったいヨナはどうなったのでしょうか。

二度目のチャンス

大きな魚のお腹の中で、三日三晩、ヨナは祈って過
しました。「神さま、ごめんなさい」と心から謝るヨナを
神様は憐れんで、魚に命じて陸地に吐き出させました。
ピュー、ドシーン。「神さま、ありがとうございます」。

ヨナはどんなに嬉しかったことでしょう。

そんなヨナに再び神様はお命じになりました。「立つ

てあの大きな町ニネベに行き、わたしのことばを伝えな
さい」。神様は一度の失敗で、もうだめだとおっしゃる方
ではありません。「もう一度やつてごらん」と二度目の
チャンスを与えて下さる優しい方です。ヨナは再び声を
聞いたとき「はい、行きます」とおことば通り出かけま
した。ニネベの町はひと回りするのに、三日もかかる大
きな町です。ヨナは町を一日歩き回りながら神様のこ
とばを伝えました。「みなさん、40日すると、この町は神
様に滅ぼされます」。それを聞いたニネベの人々は、びっ
くりして大人も子どもみんな神様のことばを信じまし
た。そのことが王様の耳にも入り、さつそく王様は町中
におふれを出しました。「悪いことをやめて、神様にお
祈りしなさい。神様が私たちを憐れんで滅ぼすのをやめ
てくださいるかもしれない」。それだけではありません。
王様みずからきれいな服を脱ぎ捨て、ぼろ服をまとい、
王様も大人も子どもも、牛や羊などの家畜も、何も食べ
ないで「神様、ごめんなさい」と心から謝りお祈りしま
した。それをご覧になった神様は、ニネベの町を滅ぼす
のをおやめになりました。神様は間違いに気づき心から
謝り、神様を信じるなら、赦してくださいる方なのです。

わがまなヨナ

ところが、悔い改めたニネベを見て、ヨナは怒ったのです。その怒り方もすぎましい怒り方で、カッカ、カッカ、怒りすぎて死ぬほどでした。「神様！ どうぞ今、わたしの命を取ってください。生きるよりも死ぬほうがましです」。なぜ、それほどまで怒ったのでしょうか。ヨナには、隣み深い神様がニネベを救うことがわかっていました。思った通りでした。ヨナには、イスラエルの敵であるニネベの人々など滅んでしまえばいいんだ、という思いがあったのです。そこで神様に文句を言いました。「だからわたしは神様のことを伝えるのが嫌だったのです。それでタルシシに逃げようとしたのです。こんなことならいっそ死んだほうがましです」。ふてくされたヨナは町の外に小屋を作って、神様がニネベの町をどうされるのかを見ていました。すると、神様は、ヨナのために葉の大きなとうごまを生えさせ日陰を作ってくださいました。「これはありがたい！ 涼しくなった」と、ヨナは大喜び。ところが次の朝、神様は一匹の虫を送ってとうごまを食べさせ、それは枯れました。その上、焼けつくような東風を起したので、太陽がジリジリ照り

つけました。「せっかくはえたとうごまが枯れるなんて、死んだほうがましだ」とヨナは泣き言をいいました。なんてわがまなヨナでしょう。

神様の広い大きな愛

その時、神様は静かに語りかけられました。「ヨナ、あなたは自分が育てたわけでもないとうごまが枯れたことを悲しんでいるね。よく考えてごらん。わたしがニネベの12万余りの人々が滅びるのを惜しまないでいられると思うかい？ 彼らは神様を知らずに思いのまま好き勝手に生きているけれど、彼らもわたしが造り、育てた民なのだよ。わたしが彼らを失いたくない心をあなたにもわかってほしいのだ。」と、み心を教えてくださったのです。

ヨナは、自分にとって嫌な相手のニネベの人々も神様は救われることを望んでおられることがやっとわかりました。神様の愛は私たちが想像もできないほど、広くて大きな愛なのです。私たちはヨナのように自己ちゅうな心でなく、神様の思いはどうかと考え、他の人の救いと祝福を祈る者となりましょう。イエス様の愛が私たちに強く迫っているのですから。

♪ヨナ、ニネベに♪（イン旧135、救いの聖歌36）

聖書 マタイ8・23〜27 テーマ 風と海を治めるキリスト

序論

(石田高保)

今日の聖書箇所を読むと、イエス様が驚くべき平安の持ち主であったことが如実にわかる。

一、神との平和

イエス様の十二弟子のうち7人はガリラヤ湖の漁師だから、しけには慣れていたはずなのに、この時ばかりは体験したことのない暴風に見舞われてパニックになってしまった。〈主よ、お助けください、わたしたちは死にそうです〉。皆さんは弟子たちに揺り起こされるまで〈イエスは眠っておられた〉のをどう思うか。舟が波にのまれそうになっても寝ていられるのはなぜかと疑問が湧く。しかし主は彼らを憐れんで行動を起こされた。〈それから起きあがって、風と海とおしかりになると、大なぎになった〉、鶴の一声とはこの事で、人間のコントロールできないはずの大自然を自分の言葉で従わせた。これに弟子たちは腰を拔かし、〈彼らは驚いて言った、「このかたはどういう人なのだろう。風も海も従わせると

は〉。彼らはイエス様の神のような力に圧倒されたが、同時に神のような心の持ち主であることにも驚いている。あとで本当の神であることを悟るのであるが。

弟子たちがパニックになったのはこの時ばかりではなく、最後の晩餐においても同じだった。そこでイエス様は明日、十字架にかかって死に、天に帰ることになっていと弟子たちに打ち明けた時、彼らはみな恐怖で凍りついた。イエス様が天に帰ってしまったら、弟子たちは拠り所を失って、誰に頼ったらよいかわからなくなってしまうから。彼らが最も必要としていたのは、確かな揺るぎない平安であった。そんな彼らに主は、「わたしは平安をあなたがたに残して行く。わたしの平安をあなたがたに与える」(ヨハネ14・27)と約束された。親が家や土地や財産を残してくれたからといって、それで心の安らぎまで保証してくれるだろうか。主が弟子たちに残された遺産の一つは、「わたしの平安」、キリストによる平安である。この平安は「世が与えるようなものとは異なる」。世が与える平安とは、順調な仕事、良い評価、良い成績、健康、家庭円満、財産、など。しかしこれらによって支えられる平安は危ういもので、何かが欠ければ

すぐに失われてしまう。しかしイエス様の与える平安は、私たちの心を揺るがす出来事が起きても、決して揺るがない。

二、神との平和を得る道

どうしたらこのイエス様の平安を身につけることができるのか。第一は、神様と正しい関係を持つことによる。人間が不安に悩まされるのは、そもそも神から離れているから。「わたしたちは、信仰によって義とされたのだから、私たちの主イエス・キリストにより、神に対して平和を得ている」(ローマ5・1)、イエス様の十字架によって勝ち取られた平和・平安である。人間の恐れの本質は、神様抜きでの生活をしているために寄り頼むものを持つていないところにある。しかしイエス様に人生を任せることによって、神様との間に何のやましいこともなくなり、神の子・プリンス・プリンセスとなり、永遠の命が与えられる。それぞれが神の愛を一身に受け、独り占めしている。それほど親しい間柄だからこそ、日々の悔い改めによって神との関係を正しくし、平安をいただく。

第二は、復活して生きているキリストを心に迎えることによる。キリストの平安が私たちの霊を防弾チョッキ

のようにガードしていて下さる。イエス様の懷に飛び込んで、後はよろしくお願いしますと委^たねれば、主の平安によって覆われる。また「何事も思い煩^{わづら}ってはならない。ただ、事ごとに、感謝をもって祈と願いとをささげ、あなたがたの求めるところを神に申し上げるがよい」(ピリピ4・6～7)。

結論

私たちの内にイエス様の平安があると、人との間にも平和を造るようになる。自分一人が平安であればそれではないというような個人の安心立命のためだけにあるのではないから。内なる平安が外に向かうと平和になる。周りの人々にイエス様の平安をお分ちすることができる。外に向かい、人のためになる平安である。「平和をつくり出す人たちは、幸いである、彼らは神の子と呼ばれるであろう」(マタイ5・9)、クリスチャンはピースメーカーである。馬が合うとか合わないでぶつかりやすい関係の中に、イエス様の平安を持つクリスチャンが一人いることによって、その場が和らぐことがある。生けるキリストが私たちと一緒に働いてくださるから。ぜひ、人間関係の悩みを相談されやすい存在となろう。

研究資料

(宮澤清志)

今日は「振起日」(Rally Day)。教会学校では毎年9月の第一主日をこのように呼んでいる。もとはアメリカの教会の慣習で「教会員一同、気持ち新たに奮い起こし(Rally)、収穫の秋に備えよう」ということのものである。さて、本日からおよそ2か月にわたって、「キリストとは誰か」という単元となる。特に今日の箇所は「権威あるキリスト」というテーマを掲げている。信仰の土台であるキリストを知ることが、私たち信仰者にとっては欠かすことのできないものである。

テキスト

本日の聖書箇所は、マタイ福音書8〜9章の中の「10の奇跡」の中の一つであり、その中心は「メシヤとは誰か」ということであり、イエスこそ自然界を支配されるメシヤであることを示している。

23 それから 本節は、18節に続く箇所である。**イエスが舟に乗り込まれると、弟子たちも従った** イエスが主導権をとって舟に乗り込まれる様子は他の福音書にはな

い。イエスに従った結果、激しい暴風にあうという弟子の姿をマタイは描こうとしているのであろう。

24 すると 直訳は「すると、見よ」(新改訳など)となる。マタイがしばしば用いた言葉。特に、予想外の出来事の事態が押し寄せてきたときに用いられている。激しい暴風 ガリラヤ湖は、海拔マイナス200メートルほどに位置し、周囲を小高い山に囲まれた小さな湖である。それゆえ普段は穏やかな湖も、周囲の山々から吹き下ろす強風によって、しばしば嵐となることがあった。舟は波にのまれそうになった 波の大きさが舟の高さをはるかに超えるさまを描いている。舟は、ここでは教会を比喩的に表現している。ところが、**イエスは眠っておられた**「眠っておられた」とは、熟睡していたという意味である。イエスはこの直前に「人の子にはまくらする所がない」(20)と語られているが、実際には、どこにあってもすばらしいまくらする所をお持ちであった。特に、この箇所では大暴風の中でも熟睡しておられたのである。それは、徹底した神への信頼があったからであろう。

25 みそばに寄ってきて 実際にイエスや弟子たちの乗った船がどの程度の大きさであったかはわからない

が、12人の弟子やイエスが乗ったならば、弟子たちが移動するスペースはなかったであろう。この言葉の背景には、イエスと弟子たちとの空間的な距離よりも、神に信頼しきっているイエスと、この大嵐の中で恐れおののいている弟子たちとの心理的距離のかい離を見ることができる。**主よ、お助けください** 弟子たちの祈りの言葉として描かれる。

26 なぜこわがるのか マタイにおいて、「こわがる」と、「信仰の薄いこと」とは同義である。恐怖は、信仰が薄いことの結果として生じるものである。**信仰の薄い者たちよ** マタイはこの表現を5回用いているが、いずれもイエスが弟子たちに対して語られた言葉である。しかし「信仰がない」(マルコ4・40)とは語っていない。この語には、イエスに従いながらもなお一步信仰の足りないところを見抜き、励ます意味が込められている。**風と海とおしかりになる** マルコはここで、イエスの言葉として、具体的に「静まれ、黙れ」と語っている。非常に強い叱責の言葉である。**大なぎ** 文字通り、大きな静けさ。

27 彼ら ここでいう「彼ら」とは、誰を指すのである

うか。ちなみに新改訳は「人々」(フランシスコ会、バルバロ、新共同訳なども)であり、ここでいう「彼ら」とは、弟子たちも含めたマタイの会衆も含められているのではないか。**驚いて** マルコの並行箇所では「恐れおののいて」(4・41)となっており、またルカも「恐れ驚いて」(8・25)とある。それに比べてマタイの表現は少し驚きのトーンが低くなっている。それは、マタイがこの奇跡そのものの驚きよりも、この奇跡の背後にあるメッセージに焦点を当ててこの物語を描いたからであろう。**このかたはどういう人なのだろう。風も海も従わせるとは** 本日の説教のテーマは「キリストとは誰か」ということであり、風や波を静める方は、ペテロが後に告白するように「生ける神の子キリスト」(16・16)である。したがって、説教者はイエスの奇跡にウエイトを置いて語るのではなく、この奇跡の背後におられる神の子キリストの権威を、それこそ説教者の権威をもって語ることに心がけたい。

参考図書 R・T・フランス「ティンデル聖書注解 マタイの福音書」(いのちのことば社) 他

聖書

マタイ8・23-27

タイトル

権威あるキリスト

暗唱聖句

このかたはどういう人なのだろう。風も海も従わせるとは。マタイ8・27

目標

すべてを支配されるキリストの権威を知り、信頼して生きる。

導入

(後藤 真)

スマートフォンに入っている天気予報のアプリはとても優秀です。天気や気温をお知らせするだけではありません。雨が降りそうになると、「雨雲が近づいています」と知らせしてくれます。そしてだいたい、お知らせがあつて五分もしないうちに雨が降り始めます。何もなくても、スマートフォンが今いる場所を自動的にアプリに伝え、今この場所に雲が近づいて、雨が降りそうですよ、というお知らせが画面に出てくるのです。

でも、こんなにすごい天気予報が来てても、いったん降り始めた雨を止めてお天気になったり、風や嵐を止めたりすることはできません。人間の力では、天気がどう変わるのか予想することはできても、天気を変えることは

できないのです。

ガリラヤ湖で

イエス様と弟子たちは、ガリラヤ湖で舟に乗っていました。イエス様が弟子たちに、舟でガリラヤ湖の向こう岸に行くようにと命じたのでした。ところが、突然激しい風が起こり、嵐になりました。波がザブンザブンと舟の中に入ってきます。舟はグラグラ揺れます。弟子たちの中には、もともとガリラヤ湖で漁師だった人たちがいました。漁師たちは舟に乗るのが上手でした。でも、こんな嵐の中ではどうすることもできません。「たいへんだ」「舟が沈むぞ」「おぼれるぞ」「助けてくれ」弟子たちはパニックになりました。

「イエス様は大丈夫かな」「海に落ちていないかな」と、イエス様の方を見ると、すやすや眠っているではありませんか。病気を治したり、教えを語ったり、休むひまもなく働いたイエス様でした。疲れていたのでしょうか。でも、このままでは、舟が沈んでしまいます。弟子たちは「イエス様！起きてください」と、眠っているイエス様をたたき起こしました。そして「主よ、お助けください。私たちは死にそうです」と、イエス様にさげんだのです。

風と海をしかったイエス様

弟子たちに起こされて、イエス様は、目を覚まししました。「なぜこわがるのか。信仰の薄い者たちよ」と弟子たちに言うと、イエス様は起き上がり、「静まれ、黙れ」と風と波をしかりました。すると、なんとということでしょう。今まであんなに吹いていた風がピタッと止まり、あんなに荒れていた波が静かになりました。あんなに揺れていた舟はまっすぐになりました。

弟子たちはびっくりしました。そして顔を見合わせて「このかたはどういう人なのだろう。風も海も従わせるとは」と言いました。はじめにお話したように、聖書の時代から二千年ほどたった今でも、人間が天気を変えることはできません。風や嵐を止めることはできないのです。聖書の時代ならもつとそうです。弟子たちは、いのちが助かったことを喜んだり、イエス様に感謝したりするのをすっかり忘れるくらい、驚いたのです。イエス様が、ことばで叱っただけで、風と海を従わせるという信じられないことが、目の前で起こったからです。

イエス様は神様

神様はこの世界をことばで造られました。「光あれ」

と言うと光ができたのです。ことばで自然を治めることができるのは神様だけです。このできごとは、イエス様が神様であり、神様の権威をもって来られたことを示す証拠でした。

イエス様は弟子たちに「なぜこわがるのか。」と言いました。でもこわがるのは当たり前です。嵐で舟が沈みそうになって、海に投げ出されそうになっていたのです。でも、弟子たちはイエス様に「主よ、お助けください」とさげぶことができました。そうするとイエス様は助けにくださったのです。

わたしたちにも、どうしたら良いのか分からないようなことがやってくる場合があります。ドキドキして、こわくなつて、心配になることがあるでしょう。でも大丈夫です。わたしたちが信じて従うイエス様は神様です。わたしたちは、世界すべてを造り、治めておられる神様に「助けてください」とお祈りすることができのです。また、教会の友だちや先生という仲間がいますからいっしょに神様にお祈りすることができます。このイエス様に頼り、従ってゆきましょう。

♪祈ってごらんわかるから♪(PW7、イン70、他)

聖書 ヨハネ6・26～35 テーマ 命のパン キリスト

序論

(小泉 創)

イエスのもとに多くの人々がおしよせました。彼らはイエスが与えてくださったパンとさかなで満腹しました。驚くべき奇跡を目の当たりにして、「ほんとうに、この人こそ世にきたるべき預言者である」(14)と、イエスを求め始めました。

一、朽ちる食物と朽ちない食物

パンの奇跡は、イエスがキリストであることの「しるし」でした。その奇跡がどのような現象なのか私たちにわかりません。しかし人々は食べて満腹したので、それが事実であることがわかりました。「きたるべき預言者」と言いながらも、人々の求めているものはパンでした。彼らはイエスを自分たちの「王」にしようとしていたのです。彼らが求めていたのは、「朽ちる食物」でした。それは日々の食物の供給であり、病の癒しであり、困窮した生活を改善し、失われたユダヤの誇りを取り戻した

めに敵を打ち破ることでした。これらの求めは形を変えて、私たちの内にもあるかもしれません。しかし神が本当に私たちに与えようとしているものは、違います。キリストは、「永遠の命に至る朽ちない食物」を与えるために来てくださったのです。

「朽ちない食物」を、私たちはしっかりと受け取っているでしょうか。それを子どもたちの手に渡していきましよう。

二、わたしが命のパンである

人々はイエスに問います。「神のわざを行うために、わたしたちは何をしたらよいでしょうか」。わたしたちが見てあなたを信じるために、どんなしるしを行って下さいますか。どんなことをして下さいますか。彼らが必要です。イエスを信じるということだけでしたが、人々はイエスではなく、癒しやパンに心をひかれてしまいました。病気の癒しも、パンの奇跡もイエスが誰であるかを指し示す「しるし」に過ぎなかったのです。

神が与えてくださり、この世に命を与えるパンのことにイエスが口にしたとき、人々はそのパンをくださいとい

いいました。決して飢えることがなく、決してかわくことがない、とはなんと素晴らしいお約束でしょうか。

しかし「わたしが命のパンである」というイエスの言葉を理解することができず、人々は互いにつぶやきはじめました。永遠の命の食物をくださるキリストを受け入れることができなかったのです。

かつて、イエスはサマリアの女に、わたしの与える水を飲むならば、その人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわきあがると伝えました(4・14)。女は、その命の水を飲み、イエスをキリストとして受け入れました。この個所でイエスを受け入れられず、離れていく人々と対照的です。

三、永遠の命のために

この後の場面でイエスは、「わたしが与えるパンは、世の命のために与えるわたしの肉である」(51)とおっしゃいました。キリストは十字架の死とよみがえりによって、信じる者に命を与えるお方です。わたしのためにもキリストは下ってこられ、裂かれたパンのように、ご自身を信じる者を生かしてくださるのです。そして弟子た

ちの多くの者もつまずいてイエスのもとを去りました(66)。どんなときにも決して失われることのない命で満たしてくださるのです。主は、「わたしはその人(々)を終りの日によみがえらせるであろう」(40、44、54)と約束してくださっています。主の約束のお言葉を信じる者に、永遠の命が与えられます(40、47)。

結論

私たちも、絶えず満たし生かしてくださる永遠の命のパンをいただきます。朽ちるものに望みをかけたり、心を奪われたりせずに、キリストを主と信じます。私をあなたの命でお満たしてください。

研究資料

(辻林和己)

ヨハネによる福音書六章は、主イエスがなされた「パンの奇跡」(6・11-14)を伝えた後、イエス・キリストが「天から下られた方」であることを証している。パンの奇跡を目の当たりにした群衆は、イエスを王にしようとか、もう一度イエスの奇跡を見たいと願って、主を探し求め、カペナウムに行った。今日の個所はガリラヤ湖の向こう岸で主を見つけた彼らの問いかけ(25)に主が答えられ、「パン」をめぐる問答が始まる場面である。

テキスト

26 しるしを見たためではなく、パンを食べて満腹したからである ここで「しるし」(ギ)「セーメイア」を見る」とはパンの奇跡が指し示す重大な意味、すなわち、主イエスが神から遣わされた方であることを悟ること。ところが群衆はそのしるしを見ないで、パンの奇跡そのものに心を奪われてしまった。

27 永遠の命に至る朽ちない食物 「肉の糧(パン)」ではなく、「霊の糧(み言葉と御霊)」を求めて生きること

がすすめられている。人の子 この称号は、旧約聖書の中では終末の救済者を表わす語として用いられている個所がある(ダニエル7・13参照)。この福音書では、主イエスが「天から下ってまた上る者」(3・13、6・62参照)と自称しておられるのと同様、ご自身の神の御子としての神性を強調する言葉として用いておられる。

ゆだね(る) (ギ)「スプハラギゾー」は元来「証印を押す」という意味。神がイエスにそれを委任されたと取ると口語訳のようになる。新共同訳では「父である神が、人の子を認証されたからである。」と訳されている。

28 神のわざを行う 「わざ」(ギ)「エルガ」は原文では複数形名詞。何をしたらよいでしょうか ここに何かを行うことによって永遠の命に至ることができるのだという律法主義的なユダヤ人の関心が表現されている。

29 神のわざである この節の主の答えでは「わざ」(ギ)「エルゴー」は単数形。永遠の命にいたる唯一の「わざ」は、「神が遣わされた者」イエス・キリストを信じ、心に受け入れることである。

31 わたしたちの先祖は荒野でマナを食べました 群衆はモーセが荒野でイスラエルの民にマナを与えた出来事

(出エジプト16・15)を引き合いに出した。そして主イエスにも同様の奇跡を求めた。天よりのパンを…食べさせ詩篇78・24の引用。人々は主イエスが第二のモーセ(申命記18・15参照)であることを期待し、「しるし(奇跡)」(30)と「肉の糧(パン)」をさらに求めた。

32 天からのパン マナのこと。イスラエルの民に天からのパンを「与えた」(ギ)デイドーケン(完了形)のは父なる神である(出エジプト16章参照)。天からのまことのパン 35節で明らかにされるように主イエスご自身のことを表わす。「与える」(ギ)デイドマイは現在形。父なる神は、今、人々に主イエスを与えておられる。

33 神のパン 主イエスご自身のこと。天から下ってきて…主イエスは天(父なる神のみもと)から下られ、霊的命をこの世(私たち)に与えて下さる。

34 主よ、そのパンをいつもわたしたちに下さい 彼らはまだ主イエスがモーセのようにマナを与えてくれると思ひ込んでいた。地上のパンではなく、天からの特別な食物(パン)を求めた。

35 わたしが命のパンである 「わたしは…である」(ギ)エゴ・エイミ」という表現はヨハネによる福音書独特

のものである。命のパン 「神のパン」(33)と同様、主イエスご自身を表わす。わたしに来る者は…、決してかわくことがない 主イエスのもとに来て、主イエスを信じる者は、「命のパン」を受け、永遠の命に生かされる。人々の霊的な飢え^う渴きを永遠に満たすことができるのは、主イエスご自身だけである。

この後も、主イエスとユダヤ人たちの問答は続く。「わたしを与えるパンは、…わたしの肉である」(51)や「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者には…」(54)等の主の言葉は後に定められる「主の晩餐(聖餐^{せいさん})」との関連を想起させる。しかし、当時のユダヤ人たちにとってこれらは不可解な言葉であった。主イエスの言葉を文字通りに受け取った多くの弟子たちは主のもとから去って行く(60、66)。彼らとは対照的にペテロは主を告白する(68、69)。「命のパン」である主イエスの「永遠の命の言葉」によって私たちは生かされ、日々、養われる。

参考図書 大宮溥「ヨハネの福音書」『説教者のための聖書講解』(日本基督教団出版局)、村瀬俊夫「ヨハネの福音書」『新聖書注解』(いのちのことば社)、他

聖書

ヨハネ6・26～35

タイトル

命の恵み

暗唱聖句

わたしが命のパンである。ヨハネ6・35

目 標

永遠の命がキリストのもとにあることを知り、キリストを信じる。

導入

(飯田勝彦)

みんなは、これまで「朝食はごはん？ それともパン？」って聞かれたことが何度もあるでしょう。実際、みんなはどっちですか？ では、イエス様の朝食は何だったでしょう。ごはん？ パン？ それ以外？

今日、イエス様は「わたしの朝食はパンです。パンにはバターとはちみつをつけます。でも一番好きなのはフレンチトーストかな。」と言われているんです。

「わたしが命のパンです」と言われます。「わたしが命のパン」って何だか不思議な言葉だと思いませんか。このことを少し考えてみましょう。

イエス様は命を与えてくださる

ごはんであっても、パンであっても食事をするければ私たちはどうなるでしょう。栄養が不足しているので、

だんだんやせて、最後には死んでしまうでしょう。ですから食事は大切なものです。食事を通して、私たちは命を保つことができます。食事の材料は肉、魚、野菜といういろいろありますが、すべてに命があります。私たちは動物や植物の命を頂いて自分の命を保っているのです。

イエス様は「わたしは命のパンです」と言われます。これはイエス様が私たちに命を与えて下さるということです。です。その命は私たちが輝いて生きていける命です。罪に支配された命は、私たちの人生を苦しめ暗くします。しかし、イエス様の内にある命を受けるなら、今ある人生を力強く輝いて生きていくことができます。しかもそれは永遠の命です。

いくら食事をして、人間はいつか死んでしまいます。でも、イエス様がくださる命は死からよみがえり永遠に生きることが出来る命なのです。これってすごいことですよね！ イエス様は私たちに素晴らしい命を与えることができます。

イエス様は満たしてくださる

皆さんの中でここ数日、食事を取っていないという人がいますか？

日本は非常に恵まれています。世界では、何日も食べ物がなく、あってもパン一つを大勢の家族で分け合っている人たちがたくさんいます。食べ物が豊かに与えられていることに感謝しましょう。

インドで貧しい人たちのために奉仕したマザー・テレサという修道女がいました。彼女はあるときアメリカの大きな街を訪れました。するある人が「マザー、ここには飢餓がありません。どうしてここに来たのですか?」と聞かれたそうです。するとマザーは答えました。「ここにも飢餓があります。それは愛の飢餓です。愛されることがなく、愛に飢えている人が大勢います。」と。

イエス様は私の所に来る者は飢えることなく渴くことがないと言われます。これは心の飢えと渴きのことを言われています。いくら食事がたくさんある家でも、家族同士が憎み合っているなら幸せではないでしょう。私たちには食べ物も大切です。それ以上に大切なものは愛です。愛で心が満たされていることは本当に幸せなことです。「わたしは命のパンです」と言われるイエス様の中には、愛が満ち溢れています。ですから、命のパンであるイエス様のところに行くなら、飢えることも渴くこと

もない愛で満たされます。

イエス様を信じて歩もう

イエス様は「神のパンは、天から下ってきて、この世に命を与えるものである」(33)と言われました。イエス様は神様がくださったパンです。ですから、命のパンであるイエス様を受け取るなら命が与えられます。その命は人生を輝かせるものであり、永遠の命であり、愛に満たされる命です。それは、どのようにしたら自分のものになるのでしょうか。

それは、命のパンを頭でなく、心で受け取ることです。具体的には、命のパンであるイエス様を救い主として信じることです。

まとめ

皆さんは、すでに命のパンであるイエス様を味わっていますか? 皆さんが毎日食事をするように、毎日イエス様を信じ、イエス様がくださる命の恵みを体験して歩みましょう。恵みは皆さんを成長させるだけでなく、周りの人も幸せにしていきます。

♪いのちの水とパン♪ (ホ22、ふ58)

聖書 ヨハネ9・1～11 テーマ 神のみわざが現れるため

序論

(高橋頼男)

道を歩いて行かれる途中、ふと歩みを止められたイエスは、道端で物乞いをしていた一人の目の不自由な人をご覧になりました。弟子たちは彼についてイエスに質問しました。「先生、この人が生れつき盲人なのは、だれが罪を犯したためですか。本人ですか、それともその両親ですか」。イエスは、答えて「本人が罪を犯したのでもなく、また、その両親が犯したのでもない。ただ神のみわざが、彼の上に現れるためである」と言われました。

驚くべき答えです。空しい、堂々巡りの過去の因縁やこだわりを全く断ち切り、新しい将来を描かせ、希望をもって生きる力を得させる、素晴らしい力ある言葉です。

一、古くからの問い(1～2)

二〇一一年三月十一日、未曾有の東日本大震災が起きました。その被害が詳しく報じられ、深刻な原発の問題も明らかになるにつれて、世界中がその惨禍に震撼し、大変な問題として受け止めました。多くの人々の思いが

突き動かされ、同情と奉仕のところが起こされました。同時に、「なぜ、こんな悲惨な災害が起こったのか」という素朴な疑問も生まれ、今まで、神のことなど関係なく生きていた人々が、にわかに「神」を問い出しました。「神さん、ひどいことしよる」。「天罰だ!」とは、そのような中で出てきた物議を醸す一つの解答です。

道端の目の不自由な人を見た弟子が「だれが罪を犯したためですか。本人ですか、それともその両親ですか」と、古くからある問いをイエスに投げかけました。「因果応報」の考えは、古くから多くの国や民族の間にもあるようです。一つの結果には必ずその原因があるという解釈です。ときに、これは苦しみの中にある人を、さらに深い苦しみの闇に突き落とし、非常に冷酷で、突き放した人生観、世界観へと導きます。その背後には非人格的で気まぐれな神観(神についての考え方)があります。

二、問題にかかわられる神(3)

弟子たちは、通りかかりの道端で、たまたま物乞いをしていて目の不自由な人を見て、イエスに日頃の疑問を尋ねたのです。通りすがりに、目の不自由な人の面前で、彼の生活と全くかわりのない世界から、「生まれつき

の盲人」を題材に、信仰問答や神学論争を仕掛けたのです。何と心ない言動でしょうか。しかし、イエスのお応えは、弟子たちの発想や予想とは全く違っていました。

①まず、「本人が罪を犯したのでもなく、また、その両親が犯したのでもない」と言われ、人々の頭に浮かぶ応報論のたぐいを否定されました。

②イエスは、弟子たちが期待した疑問に直接応対する答えをなさいません。「神さまは、わたしたちが答えを知りたいと切に願う疑問に必ずしも答えを与えられるわけではありません」(『なぜ私だけが苦しむのか―現代のヨブ記』H. S. クシュナー)。

③さらに、「ただ神のみわざが、彼の上に現れるためである」と驚くべき言葉を語られたのです。

この言葉の中に、すでにこの目の不自由な人にかかわっていかうとされる神のみ心が明らかにされています。罪に満ちた人間世界を見捨てず、むしろ積極的なかわりを持つため、矛盾と意味不明、わけがわからなくなっている混沌こんとんの世界を引き受けるため、事実、神のみ子はおいでになったのです。そして、ついに理不尽極まる呪いの十字架に自らつけられ、「わが神、わが神、どうして

わたしをお見捨てになったのですか」(マルコ15・34)と叫ばれました。「どうして、なぜ」と問わずにおれないこの世界の悲惨、人生の矛盾や混沌に対して、これこそ、この事実こそ、神の答えではないでしょうか。

三、神のみわざが現れるため(3、6、7、25、38)

イエスは、この目の不自由な人の信仰を訓練し、導かれました。彼はお言葉に従い、シロアムの池に行って洗うと、見えるようになったのです。そして彼は、肉の目が開かれただけでなく、ついに霊の目も開かれました。迫害の中で主を力強く証しし、主を礼拝する者とされ、神の栄光のために生きる新しい人生が始まったのです。

私がお会いした目の不自由な信仰者10人のうちの10人が「私はヨハネ9・3のみ言葉で救われた」と感動をもって語られました。お一人お一人の内に秘められていた過去の煩悶はんもんを思います。しかしイエスのこの言葉が過去を断ち、未来に生きる勇気を与え、束縛から真の自由へと霊の目を開き、闇から光の世界へと導いたのです。

結論

神のご計画の最善を信じ、神のみわざが現れる生涯を生き抜きましょう。

研究資料

(中島啓一)

シロアムの池での目の不自由な人のいやしは、先に8・12でなされた「わたしは世の光である」という宣言の具体的な例証と言える。ベテスダの池での足の不自由な人のいやし(5章)と類似点も多いが、いやされる側に能動的な役割が与えられている点で対照的である。この人はイエスの命令に従い、その結果「神のみわざ」が現れた。さらに彼は、曲折を経て、自分に恵みを施して下さった方の本当のお姿を知ることになる。そして「主よ、信じます」(38)との信仰告白に至るのである。

テキスト

1 生れつきの盲人 当時、目の不自由な人は、施しに頼るほか生活の術がなく、人々が慈善に心を向けやすくなる神殿近くで物乞い^{ものこ}することが多かった(使徒3・2)。

2 この人が生れつき盲人なのは 目的・結果を示す接続詞[ギ]ヒナが用いられている。「誰かが罪を犯した↓それゆえ目が不自由である」という発想である。当時のユダヤ社会では、目が見えないなどの苦難は罪の結果であると考えられた。「誰かが…」を当然の前提と見なして、

弟子たちの議論は「誰が…」に飛躍する。だが罪を犯したためです。両親の罪、胎内にいる時の本人の罪などを想定している(ただし、本人の罪という日本人は前世の罪を連想するかもしれないが、ユダヤにその発想はない)。この応報(天罰)の発想は、ヨブの友人たちの考えからほとんど進歩していないものである。

3 ただ神のみわざが、彼の上に現れるためである イエスも[ギ]ヒナを用いるが、弟子たちとは方向が正反対である。すなわち、「目が不自由である↓神のみわざが現れる」という方向であり、これこそが神の発想である。ただし神が意図的にその人を目が不自由な者として誕生させられたと考えるのは早計である。測り知れない神の摂理があることを人は謙遜に受け止める必要がある。摂理の中で、一見(あるいは一時的には)不幸に思えることを通しても、神は超越的な力を発揮されて、結果的には、その人がイエスのみ顔に映る神の栄光を見ることができるようにして下さった。さらにそのみわざを通して、周囲の人たちにも、イエスこそがまことの世の光であることを認めるようにと、方向転換を促されたのである。

4 わたしたちは、わたしをつかわされたかたのみわざを、

昼の間にしなければならぬ。一義的には自身について語っている。「わたし为天から下ってきたのは…わたしをつかわされたかたのみこころを行うためである」(6・38)。「昼の間に」は自身が世にいる間ということだろう(5)。その上で「わたしたち」(弟子たちや教会)もイエスの弟子であることを自覚し、そのわざを励むのである(14・12参照)。夜が来る。すると、だれも働けなくなるユダがイエスから離れて「夜」に出て行ったことは象徴的である(13・30)。

5 わたしは、この世にいる間は、世の光である 8・12における宣言を踏まえての言葉。このいやしはまさにその宣言の具体的な例証と言える。

6 地につばきをし… つばきをいやしに用いる例はいくつかあるが(マルコ7・33、8・23)、土と混ぜてどろを作るのはここだけである。

7 シロアム(つかわされた者、の意)の池 シロア(イザヤ8・6)、シラの池(ネヘミヤ3・15)も同じ場所とされる。伝統的にヒゼキヤがギホンの水を引くために掘った地下水路(歴代下32・30)の終点とされてきたが、2004年に南東100メートルほどの場所に新たな遺跡が

発掘され、今日、そこが本来のシロアムの池と考えられている。その名は、ここではまさに神からつかわされた救い主であるイエスを指し示していると言えよう。そこで彼は行って洗った。そして見えるようになって…彼もまたイエスによって「つかわされ」、言われたとおりに従った。すると、神のみわざが現れ、彼は生まれて初めてその目で神の造られた世界を見るに至ったのである。

8・10 おまえの目はどうしてあいたのか 長年そこで物乞いをしてきたその人を周囲の人はよく知っていた。それゆえ、彼の身に起こったことを不思議がり、またなぜそうなったかを知りたがったのは当然であった。

11 イエスというかたが…見えるようになりました 彼は簡潔に事実を伝えた。ここでは「イエスというかた」という表現にとどまっているが、以後、彼の中でのイエスは像は段階的に成長していく。すなわち「預言者」(17)、次に「神からきた人」(33)と変化し、最後には「主よ、信じます」と、信仰と礼拝の対象になるのである(38)。参考図書 注解書 G. R. Beasley-Murray (Word), F. F. Bruce (Eerdmans), B. Lindars (New Century Bible), 他 The IVP Bible Background Commentary: NT

聖書

ヨハネ9・1～11

タイトル

心の目を開いてください！

暗唱聖句

わたしは、この世にいる間は、世の光で

目 標

ある。
ヨハネ9・5

世の光キリストによる救いを頂き、キリストに従って生きる。

導入

(飯田勝彦)

友だちが「昨日、学校休んだけど大丈夫？」とか、「宿題一緒にやらない？」などと声を掛けてくれたら、どんな気持ちになりますか？ 嬉しいでしょう。友だちが自分のことを気にかけてくれる時、本当に励まされますね。今朝の個所ではイエス様が目の見えない人に、関心をもつて気にかけてくれたことが記されています。

イエス様は、皆さん一人一人のことにも関心を寄せ、いつも見てくださっています。

神のみわざが現れた人

ある時、イエス様が道を歩いておられるとは目の見えない人を見られました。イエス様は彼を裁いたり、軽蔑の目で見たりしませんでした。イエス様は、弱っている

人たちにも関心を示し、優しく接してくださる方です。

もし皆さんがこの彼のように、目が見えなかったならどんな気持ちでしょうか？

道のあるいている途中にイエス様は、おそらく足を止め、じつと盲人を見ておられたのでしょう。突然立ち止まったイエス様の視線の先を見た弟子たちは、イエス様に尋ねます。「この人が盲人になったのは、罪を犯したからですか？」。イエス様は「本人や両親が罪を犯したからではありません。神のみわざが現れるためです」と答えられました。それから、つばきでどろを作って盲人の目に塗られました。盲人がイエス様が言われた通りにどろを池で洗うと、何と目が見えるようになったのです。まさに神のみわざがこの盲人に現わされました。

神のみわざを現されたイエス様

旧約聖書に「主は盲人の目を開かれる」(詩篇146・8)と記されてあります。ですから、盲人の目を開くことができるのは、人ではなく主なる神様だけでした。ですから、盲人の目を見えるようにされたイエス様は、まさに神様です。

それを思うと皆さんは、これまでイエス様の多くの奇

跡を聞いてきたでしょう。その奇跡を皆さんは心から信じていますか？ 奇跡を聞くたびに心の中で「ホンマかな。うそくさい」と思ったりしていませんか。イエス様は神様ですから何でもできるお方です。足の不自由な人をいやすたり、水の上を歩き、嵐さえしずめることができたのです。

イエス様は、多くの人々を助けるために、世の光として来られ、神様のわざを現されました。

神のみわざを体験できる私たち

イエス様が盲人の目を開き、神のみわざを現されたのは、今から二千年も前のことです。そんな昔のことが今、現実におこるでしょうか。起こります！ 復活されたイエス様は今も生きて働いています。だから、今も私たちに神のみわざを現してください。

イエス様を通して神のみわざを体験する秘訣があります。それは皆さんがイエス様を心から信じ、イエス様の言葉に従うことです。

盲人の目がいやされるためにイエス様は、目にどろをぬられました。それだけではありません。イエス様は盲人に「シロアムの池にいった洗いなさい」と言われまし

た。もし、盲人がイエス様を信じず、イエス様の言葉に従って池に行かなかったなら、目はいやされなかったでしょう。

盲人はイエス様の言葉を信じて池に行き、言われた通りに目を洗うといやされたのです。

今、イエス様は、皆さんの心の目を開きたいと願っておられます。心の目が閉ざされていると神様を信じることができません。皆さんの心の目は開かれていますか？ 心の目が開かれると、聖書が分かり、イエス様のことが神様のことがよくわかるようになります。そして、自分がどんなに神様から愛され支えられているかを体験できます。そのためには、心の目を開いてくださるイエス様を信じることです。心の目が開かれると盲人と同じように神のみわざがあなたに現わされた証拠です。

まとめ

心の目が開かれると心に光が入るように、皆さんの表情や生き方を明るくします。世の光であるイエス様を信じましょう。

♪イエスさまにまさる♪ (ホ65)

聖書 ヨハネ10・1～15 テーマ 羊飼いきリスト

序論

(高橋頼男)

キリストは、「わたしはよい羊飼である」、また、「よい羊飼は、羊のために命を捨てる」と言われました。主イエスが、私の良い羊飼いであるということは、私にとつて、どういう意味をもつことなのでしょう。

一、弱く迷いやすい羊(イザヤ53・6)

羊は弱くて迷いやすく、また、迷っていることの自覚さえないこともあります。迷い出てしまった羊は、危険な状況にあります。オオカミやハイエナなど、羊を狙う猛獣がいますし、断崖や地表の割れ目、深い谷など、あらゆる危険が待ち受けています。

主イエスは、私たち人間がおるべきところから逸脱し迷い出た存在であることを、「失われた者の三つの姿」(ルカ15章)のたとえを通して教えられました。これらは神を離れた人間の悲惨な姿です。そして、私たちの内には、神の尊さを頂きつつも、孤独や空しさ、存在の意味を失ってしまっている「失われた者の自覚」があります。

さらに、イエスは「人の子がきたのは、失われたものを尋ね出して救うためである」(ルカ19・10)と言われました。主は迷い出たものを、そのまま放っておかれません。迷い出て失われたものを何としても救い出すために、覚悟と決意をもって行動なさるお方です。私たちは、弱く、迷い出てしまった一匹の羊ではないでしょうか。

二、良い羊飼(3～15)

主イエスは、私は「良い羊飼い」であると言われました。良い羊飼いとはどのような者でしょうか。

①羊のことをよく知っている(3、14)

何よりも、自分の羊のことに関するあらゆることを熟知している羊飼いこそ良い羊飼いです。彼は「自分の羊の名でよんで連れ出す」のです。その羊の一匹一匹の特徴と性質をよく知ったうえで、養い導いてくださいます。

②羊の門となる(7)

夜になると羊たちは囲いの中に入りますが、門には扉がありません。そのままでは危険ですから、その門のところに羊飼いが身を横たえて、自らが門となって番をします。夜中には、羊を狙って猛獣や盗人・強盗がやって来ます。しかし門となって横たわっている羊飼いを踏

み越えてでなければ、羊を襲うことはできません。良い羊飼いは、体を張って羊を守るのです。主イエスは「わたしは門である」と力強く言ってくださいます。

③羊のために命を捨てる（11、15）

良い羊飼いは、自分の羊を守るために、盗人や強盗、恐ろしい猛獣などと命を懸けて戦います。そのため、時には羊飼いが命を落とすこともあったのです。しかし、やとわれの羊飼いは、自分の命を懸けることまではしません。自分の羊ではないからです。主イエスは、私たちをご自分の羊として取り扱われます。十字架に命を投出して愛してくださいました。

三、安らかな出入り、豊かな養い（9、10）

羊のことをよく知り、心にかけて、命までも与えてくださる良い羊飼いに信頼してついでいくなら、「やすらかな出入り」、すなわち、私たちの人生の初めから終わりまで、安らかで安全、充足していることが約束されています。

また、主は「わたしがきたのは、羊に命を得させ、豊かに得させるためである」と言われました。良い羊飼いである主の豊かな養いにあずからせていただきますしやう。その恵みと祝福は、詩篇23篇に言い表されています。

「主は私の羊飼いですから、必要なものはみな与えてくださいます。主は私を牧草地に*いこ*わせ、ゆるやかな流れのほとりに連れて行かれます。傷ついたこの身を立ち直らせ、私が最高に主の栄光を現す仕事ができるよう、手を貸してくださいます。たとい、死の暗い谷間を通ることがあっても、こわがったりしません。主がすぐそばにいて、道中ずつとお守りくださるからです。…まるで、あふれんばかりの祝福です。生きている限り、主の恵みといつくしみが、私についてきます。やがて、私は主の家に着き、いつまでもおそばで暮らすことでしょう」（リビング・バイブル）。

主は「わたしはよい羊飼である」と言われます。私たちは「主は、私の牧者です！^{あずか}」と、心から応答し、その豊かな養いに与るものと*あずか*らせていただきますしやう。

結論

主イエスこそ私の良い羊飼いです。このお方は、弱く、迷いやすい私たちのことをよく知って、私たちを守り、導かれます。私のために、命さえ惜しまず与えてくださいました。私たちの羊飼いであるキリストを、新しく仰ぎ、このお方に信頼し、全てを委ね、お従いしましょう。

研究資料

(中島啓一)

前章で、イエスは生まれつき目が不自由であった人を見えるようにされたが、パリサイ人らはその人を会堂から追い出してしまった(9・35)。それは宗教共同体からの破門を意味する。そのことを踏まえて、イエスはこの羊飼いのたとえをパリサイ人たちに語ったのである。

このたとえの中で、よい羊飼いがイエスであることは言うまでもないが、盗人、強盗が当時の宗教指導者たちを指していることも明らかである。すなわち、神から、その所有である羊を託されていたはずの指導者たちは、目が不自由であったその人をも責任もって世話するべきであった。なのに、かえって彼を囲いの外に追い出してしまった。しかしその人はイエスというまことの羊飼いと出会い、その囲いに導き入れられるに至ったのである。

このたとえの背景にはエゼキエル34章がある。エゼキエルを通して神は、「あなたがたは脂肪を食べ、毛織物をまとい、肥えたものをほふるが、群れを養わない」(3)と、宗教指導者たちを糾弾した。羊を守るはずの彼らによって「わが羊は散らされ」(6)た。それゆえ神は、彼

らから職を取り上げ、散らされた羊を捜し集め、その群れのために「ひとりの牧者を立てる」と約束された。「わがしもべダビデ：彼は彼らを養い、彼らの牧者となる」(23)とある。今やその預言は成就した。すなわちダビデの子孫であるイエスこそが、神がその民のためにお立てになった、最良の羊飼いなのである。

テキストト

1 羊の囲い 夜間、羊は石の壁で作られた囲いに入れられた。その壁の上部には、侵入防止のいばらがあつた。盗人であり、強盗である ユダヤの語彙では、家などに押し入るのが盗人、屋外で通行人などを襲うのが強盗である。羊飼いはその両者から群れを守る必要があつた。

2・3 門 囲いの門は普通一カ所に設けられ、門番によって守られていた。羊は彼の声を聞く。そして彼は自分の羊の名をよんで連れ出す 複数の羊飼いによって一つの囲いが共用されることは普通であつた。その場合でも羊飼いは門に立つて羊の名を呼ぶだけでよかった。羊が飼い主の声を知っているからである。ここに羊飼いと羊の間の人格的なきずなを見出すことができる。神はご自身の所有の民を名前で呼ばれる(イザヤ43・1)。

5 ほかの人 宗教指導者たちを指す。彼らは見えないのに「見える」と言い張り、神から託された羊を間違った方向に導こうとした(9・41)。

6 彼らは：何のことだが、わからなかった 自分たちこそ神から群れを託された羊飼いだ、と自認していた彼らには、たとえの真意が分からなかった。

7 わたしは羊の門である 「羊飼のたとえ」の中に、短い「門のたとえ」(7、9)が挿入されている。後に語られる「わたしは道であり：」(14・6)と意味的に近いと言えるだろう。イエスこそ、救いへの道であり、また門なのである。

9・10 わたしがきたのは、羊に命を得させ、豊かに得させるためである よい羊飼いは、群れの羊が最低限の必要のみを与えられ、なんとか生きながらえているだけでは満足しない。主の望みは、神の民が永遠の生命を受け、その人生を最大限の豊かさで生きることなのである。

11 わたしはよい羊飼である。よい羊飼は、羊のために命を捨てる 盗人(不誠実な指導者たち)は、群れのためにではなく、自分の利益のために行動する。しかしよい羊飼いきリストは群れの羊を盗人や獣から守り、彼ら

に命を与えるために、自分の命をお捨てになるのである。

12・13 羊が自分のものでもない雇人 雇人は、よい羊飼が持っているような羊に対する人格的な愛を持ち合わせておらず、危険が迫るときには自分を優先にする。この雇人がたとえの中で何を指すのかは定かではない。盗人などと並行して宗教指導者たちを指すと考えてもよさそうだが、雇人は盗人のように悪意に満ちてはいない。何を指すにしても、それがたとえの中心ポイントではなく、それとの対比によって、よい羊飼いの性質がさらに浮き彫りにされるということが重要であろう。

14・15 わたしの羊を知り、わたしの羊はまた、わたしを知っている 羊を知り、羊に知られているということ、よい羊飼の証しである。動詞(ギ)ギノースコー(知る)は現在形で、一時的でない永遠の知識を示している。父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じ 御父と御子とのお互いを知る特別な知識に基づく関係が、羊飼いと羊との関係にまで拡大されるのである。三位一体の永遠の交わりに招くという人間の創造の目的が、ここにも表されていると言えよう。

参考図書 9月18日分と同じ。

聖書

ヨハネ10・1～15

タイトル

イエス様は私たちの羊飼いです！

わたしはよい羊飼いです。よい羊飼いは、

羊のために命を捨てる。ヨハネ10・11

目 標

私たちのために命を捨ててくださった羊飼いきリストを信じる。

導入

(和田 治)

みんなのまわりに野良犬とか野良猫っていますか？
お世話をしてくれる人間がいなくても生きていますよね。
ほとんどの動物は、人間のお世話が要りません。でも羊
は『羊飼ひ』のお世話がないと生きていけないんですよ。
今日は、「わたしはよい羊飼ひである。よい羊飼ひは、羊の
ために命を捨てる」というお言葉を味わいましょう。

迷子の羊

よい羊飼ひであられるイエス様を信じていないときの
私たちは、ちょうど、迷子まいこの羊のようです。羊飼ひから
離れた迷子の羊は、必ずお腹はぺこぺこになり、のどは
からからになり、困り果ててしまいます。恐ろしい狼や
ハイエナに襲われてしまいます。危険なげや深い谷も

あるのです。しかも、迷子の羊は自分で羊飼ひのところ
に戻ることができません。羊飼ひが探しに来て、見つけ
出してくれなければ、滅びるしかないので。私たちも
もし、よい羊飼ひであられるイエス様のもとから迷い出
てしまったままなら、そこには危険や誘惑がいっぱい！
あぶない！ 迷子の羊と同じではないでしょうか。

でも大丈夫！ イエス様はよい羊飼ひです。私たちは
イエス様の羊なので。では、よい羊飼ひであられる
イエス様ってどんなお方でしょう？

よい羊飼ひ

よい羊飼ひは「羊のことを良く知って」います。百匹
でも二百匹でも、飼っている羊の名前を全部覚えていま
す！ そして、「めーちゃんは少し元気がないな…」「し
ろ君は少し怯えていて落ち着きがないな…」って、よく
分かっていてくれるんです。イエス様も私たちのこと
を、全部知っていてくれるんですよ。何が辛いのか、どれ
くらい苦しいのか、どうして泣いているのか…。だから、
その痛みを癒しいやす、本当の慰めで満たしてくれるんです。

そして、よい羊飼ひは「門」になってくれます。「え？
どういうこと？」って思うよね。羊を飼う山や丘では、

夜になると羊たちは囲いの中に入ります。でも、その門には扉がないんです。そのままでは危ないので、門のところに羊飼いが身を横たえて、なんと、自分が門となつて番をするんです。夜中は羊たちにとつて、とっても危険なとき…。羊を狙つて猛獣やどろぼうがいつやつて来るかわかりません。門となつて横たわっている羊飼いは、「ぼくの羊はぼくが守る！ 羊に手出しはさせない。どうしても羊を襲うつもりなら、ぼくを殺してからにしろ…！」つて、まさに命をかけて羊を守ってくれるのです！ さつすがあ！ よい羊飼いい！ たのしいですよーね！

イエス様は「わたしは羊の門である」とおっしゃいました。そして、「わたしはよい羊飼である。よい羊飼は、羊のために命を捨てる」とのお言葉通り、十字架にかかつて、私たちのために命を投げ出してくださいだったので。

コルベ神父

第二次世界大戦という戦争のときのことです。ナチスドイツによつて、たくさんのユダヤ人やポーランド人が、悪いことをしていないのに捕まえられ、殺されました。その内の一人、コルベ神父のことをお話しましょう。アウシュビッツという所で一九四一年、脱走者が出たので。

す。そこで、罰として誰か10人が、食べ物も飲み物も与えられず殺されることになりました。選ばれた10人のうちの一人が泣き叫び出しました。「私には妻と子どもがいます。絶対に死にたくないです。助けて下さいー！」この声を聞いたとき、そこにいたコルベ神父は「私が彼の身代わりになります。私はカトリック司祭で妻も子もいませんから」と申し出たのです。コルベ神父と9人が地下牢の餓死室に閉じ込められました。普通そこは、最後の一人が死ぬまで、うめき声や泣き声や叫び声が聞こえてくるそうです。でもその時は、お祈りや賛美の歌声によつて餓死室はまるで礼拝堂のようだったそうです。コルベ神父が身代わりとして死んでくれたために助かったガイオニチエクという人は、戦争が終わつてから、コルベ神父がしてくれたことをたくさんの人々に伝えました。

まとめ

イエス様が私たちのために十字架で命を捨ててくださいなければ、私たちは迷つた末に滅びるしかありませんでした。よい羊飼いであられるイエス様に心から感謝し、安心して従っていきましょう！

♪ちいさいひつじが♪（こ72、こ改55、新聖歌485）

牧羊ひろば



高松新生教会 教会学校

「牧羊ひろば」に、私たちの教会学校、子ども伝道の様子を載せていただく機会を与えられ感謝いたします。今、ありのままの姿を紹介して、今後とも、お祈りいただけると信じて、感謝をもって記します。

一 粒ぞろいの教師陣

幼子を愛し、彼ら一人一人の救いのために重荷をもって、時をささげでご奉仕下さるCSの先生方の存在は大きいです。素晴らしいことに、校長の牧師を含めて、12名の教師で、祈りつつ子どもたちのために備え仕えさせていただいています。CS教会は毎月第二聖日、各会例会後14

時半～15時半くらいです。毎月の賛美の選曲と奉仕者の確認、誕生カード担当者などを決めます。行事にも備えます。半世紀を超えてご奉仕されてきたベテランの先生方や20年、10年と奉仕されてきた先生方、つい4～5年

前から加わって下さった先生方、そしてこの春からのニューフェイスの先生もおられます。年齢層は20代～70代です。CS礼拝説教は毎月1回される方3名、3カ月に1回される方3名、第5週を担当される方1名、牧師は、教会暦に沿って、合同礼拝の時、視覚教材を用いて語ります。それぞれに全力投球で、礼拝に少し早く来れる方々も含め、聞く者皆恵まれます。早目にこられる



2016年3月27日（日） CS教師任命式

信徒の方々もCS献金をささげて下さるのでCS会計は
とても潤っていて感謝です。書記、会計、各1名、奏楽
奉仕者2名、司会とパワーポイントは持ち回りで、また
隠れたところで、み言葉や聖書日課をダウンロードして
用意して下さったりと、まさにCSの働きは細かい作業
です。しかし、主は報いてくださいます。こうしたCS
教師の働きのために、またCS生徒の名簿を、「高松新生
教会祷告課題」の裏面に印刷して、3カ月ごとに更新し
たものを、全教会員に配って、祈って頂いています。次
は毎月のCS教師会のレジユメの中に書記の先生によっ
て常時記されている一文です。

「子ども伝道はいつも大切、教会の嗣業しきようである、主よ
りの祝福であることを覚えて！ 礼拝をささげること
が、子どもたちの喜びであり、楽しいと感じる教会学校
であるように！」

二 愛されている子どもたち

1 通常のプログラム

「教会学校」は、毎週日曜日朝9時15分から10時、「か
えるクラブ」は毎週木曜日午後3時から5時です。ただ



2015年11月8日（日） 視覚教材を用いて、
バルテマイの話。子ども祝福合同礼拝。

し「かえるクラブ」は、学校がお休みの時は同じくお休
みです。昨年の出席平均は、教会学校4名、かえるクラ
ブ10名でした。9時から9時15分は教師祈り会です。

「教会学校」はCS礼拝の後、分級が3年前から始ま
りました。せっかく出席した生徒たちと、ワークや交わ
りを通して、教師とお互いの近寄りの場が与えられて
感謝しています。いずれもポイント制があり、かえるク
ラブに来ると1ポイント、日曜日に来ると5ポイントで

す。50ポイントになると「バイブルキャンプ半額援助券」がもらえ、80ポイントになると、「聖書」がもらえ、次の80ポイントで「聖書カバー」がもらえ、その次の80ポイントで「きょうのマナ」がもらえます。聖書をもって、教会学校に来てくれること、その週のみ言葉の箇所を自分の聖書に印をつけることを願うことです。「かえるクラブ」には自由に出入りし、思い切り遊び（卓球台



2016年3月27日（日） 入学進級お祝い



2015年12月12日（土） クリスマスエッグ作り

があります。16時半から少しのみ言葉タイムとおやつタイムを持ちます。その週のCSのみ言葉と短いお話し、そして、毎週手作りケーキです！

2 スペシャルプログラム

① イースター、母の日花の日、クリスマス合同礼拝。

のちに記す「子ども祝福礼拝」を含め、年4回は大人

も子どもも合同での礼拝です。CS生徒、教師、有志の方々、COLT（ギタークラブ）で、なにか1曲演奏します。そして子どもたちにもわかりやすい視覚教材を使つてのメッセージです。イースターには入学進級のお祝いとプレゼントです。

②教会お泊り会

「教会にお泊りする」ことは子どもたちにとって、大きな喜び、楽しみのようです。7月、夏休みに入つて間もない土曜日の午後3時から、翌日曜日の教会学校ま



2015年7月25日（土）
お泊り会ゲーム・すいか割り

でというのですが、スイカ割を含むゲームから始まり、夕食、聖書のお話し、温泉、花火、就寝です。翌日は6時半に出発して、近くの山の上の公園に行き、朝の空気の中でピクニック（朝食）です。そして教会学校の時間に間に合うように帰ってきます。10名前後の子どもたちと数名の先生方がお泊りします。

③子ども祝福礼拝・子どもカーニバル

毎年11月第2聖日に行います。演奏と共に礼拝の中で子どもたちを祝福する祈りと、プレゼントがあり、記念撮影をします。この時も子どもたちにわかりやすい視覚教材を使つてのメッセージです。さて、その午後、お待ちかねの子どもカーニバル！「子どもたちをとことん楽しませてやりたい」という壮年の先生方、壮年会の皆さんの熱意から、二〇一〇年より始まりました。CS教師はもちろんのこと、壮年、婦人、青年総出で準備し、本番を迎えます。2週間前にはおなじみ食券付きのアンパンマンチラシが配られます。教育館玄関にも貼り出されます。当日は教育館前にテントも張られます。焼きそば、タコ焼き、フランクフルト、おにぎり、ポップコー

ン、サンドイッチ、アイスクリーム、ポテト、ドリンク類、ゲームコーナーもあります（ある年は金魚すくいも！）。おみやげはアンパンマンとトロクッキーです。求道者のご家族や祈られている子どもたちが来られ、毎年盛況です。そこで、11月のハーベスト・サンクスギビング・フェスティバルやクリスマスの案内を渡します。25〜30名の子どもたちが兄弟やお友達を誘って訪れま



アンパンマンクッキーとトロクッキー
アンパンマン看板です。2015年11月8日（日）

す。子どもも大人も楽しめるすぐれたプログラムです。

④ 子どもクリスマス

第三アドベント聖日前日の土曜日午前10時から11時半。たのしい紹介やゲーム、毎年趣向を凝らした創作タイムがあります。キャンドル作り、ステンドグラス（紙）作り、クリスマスエッグ作り、ある年は劇！ などなど。クリスマスメッセージ、そして来年の子ども向けカレンダーとお菓子のプレゼントです。15名前後の出席です。教会学校やかえるクラブに励んでいる子どもたちには、クリスマス礼拝にて、一人一人のために用意したプレゼントを渡します。教会の本番のクリスマス礼拝と愛餐会祝会にも子どもたちが喜んで楽しみに出席します。

三 神様のなされている不思議

二〇一四年度を終わるにあたり、クリスチャンホームから出席して皆勤賞だった小6の受洗している生徒が、中学生になるとき、CSはどうなる？ と祈っていました。すると、二〇一五年5月〜二〇一六年4月の一年間の間に、なんと！ CS教師の3名のご夫人方に幼子た



2016年3月27日（日）
CS教師夫妻の長男献児式

ちが与えられました！ お二人のご主人方は教会役員・CS教師、もう一人の方は教会役員・協力者です。親と必ず一緒にCSに出席する子どもたちの存在は真に大きく感謝でいっぱいです！ 近隣の子どもたちも励んでくれて、います。牧師は彼らのご家族との交わりを大切にして、毎月「福音版」と「らみい」「みことばカード」と「聖書日課」を届けます。「温かく見守って下さって」と感謝してください。結実を祈り待ち望み、接触を継続します。二〇一六年4月10日（日）から「ジュニヤルーム」を設けて、「ジュニヤクラス」をスタートします。昨年ク

リスマスに受洗した中3の兄弟と小2で受洗した中2の姉妹と、かえるクラブ、CSに集う、この春中学高校に入学進級した子どもたちがターゲットです。毎週日曜日10時から10時半という短い時間ですが、自分たちの居場所を提供することがその意図です。その後、礼拝に出席する形です。CS中高生伝道は、教区のスプリングジャムやバイブルキャンプに負うところ大です。

球根の中には花が秘められ、さなぎの中から命羽ばたく。

寒い冬の中春が目覚める その日その時をただ神が知る。

（讃美歌 21 575番）

この春ヒットした賛美です。私たちの教会学校、子ども伝道を歌っているようにも思えて賛美しました。二〇一六年度、神様はどのような不思議を備えていて下さるでしょうか!? 神様と皆様のご加禱に大いに期待いたします。

（牧師 小野淳子）



●使徒の働き

行事

テーマ

聖書

暗唱聖句

7月3日

マケドニヤからの叫び

使徒16:6〜10

同9節

10日

獄吏と家族の救い

使徒16:25〜34

同31節

●旧約⑦預言者

行事

テーマ

聖書

暗唱聖句

7月17日

エリヤ①生きて働かれる神

列王上17:1〜16

同1節

24日

エリヤ②火をもって答える神

列王上18:20〜40

同24節

●キリストとは誰か^{だれ}

行事

テーマ

聖書

暗唱聖句

9月4日 ラー・デー

風と海を治めるキリスト

マタイ8:23〜27

同27節

11日

命のパンなるキリスト

ヨハネ6:26〜35

同35節

18日

世の光なるキリスト

ヨハネ9:1〜11

同5節

25日

羊飼いなるキリスト

ヨハネ10:1〜15

同11節

8月7日

ナアマン將軍の癒し^{いや}

列王下5:1〜14

同13節

14日

取り囲む神の守り

列王下6:15〜23

同17節

21日

神に背いたヨナ

ヨナ1:1〜17

同9節

28日

神の憐れみ^{あわれ}を知る

ヨナ3:1〜4:11

同4:11節

31日

エリヤ③励まし力づける神

列王上19:1〜18

同11節

おわりに

『牧羊者』二〇一六年度第Ⅱ巻をお届けできますことを感謝します。また、執筆者のご労苦に感謝いたします。

教師養成講座は、今号も引き続き、森沢尚生師に、「聖書の教える人格教育 第三回 人格教育の方法2」を執筆していただきました。「牧羊ひろば」は高松新生教会のCSを紹介していただきました。

今号の執筆者、奉仕者を紹介いたします。

『牧羊者』のご購読・ご利用について

* 分級用に、ワークA(幼稚科向け)、B(主に小学生1~3年生向け)、C(主に小学生4~6年生向け)を用意しています。また、付録として「子ども聖書日課」、「フラッシュカード」、「み言葉カード」、「中高科へのヒント」があります。いずれも、下記ホームページから無料でダウンロードできます。送付ご希望の方には、ワークは各600円+税でお送りします。
信徒局 教会教育室 ホームページ
<http://cs.jccj.info/>

* ご注文は、日本イエス・キリスト教団(事務局)まで。申込み、部数変更等のための用紙も、上記ホームページからダウンロードできます。
神戸市兵庫区塚本通3-3-19
電話 (078) 575-5511
FAX (078) 575-6611

聖書講解	石田高保師	小泉 創師	高橋頼男師
研究資料	金井信生師	小平德行師	金井由嗣師
	宮澤清志師	中島啓一師	
	辻林和己師	和田 治師	飯田勝彦師
メッセージ例	松浦みち子師	土屋開夫師	後藤 真師
	水野晶子師	吉田美穂師	佐川直実師
ワーク(A)	鎌野 幸師	山下大喜師	竹崎光則師
(B)	勝田幸恵師	田中裕明師	
(C)	上森恭子師	後藤健一師	
中高科へのヒント	石田高保師	金田ゆり師	小野淳子師
子ども聖書日課	田中愛子師	松浦あん師	
フラッシュカード	丹羽 遥師	山下 愛師	
み言葉カード	丹羽 遥師		
イラスト	多田豊子師		
ワープロ打ち込み	長田栄一師	加藤 清師	山田和幸師
校 正	中島啓一師		

また、事務作業・発送の教団事務所の兄姉、印刷の松木共栄印刷、菱三印刷に心から感謝いたします。(中島啓一)

聖書教育教案誌 牧羊者

二〇一六年度 Ⅱ巻

二〇一六年七月一日発行

発行所

企画監修

日本イエス・キリスト教団 信徒局 教会教育室

神戸市兵庫区塚本通三二一三一九

電話 (078) 575-5511

FAX (078) 575-5511

印刷所 菱三印刷株式会社

電話 (078) 576-1396

* 日本聖書協会「口語訳聖書」使用許諾済み